

英語にとって「読み」とは何か（上）

「構造読み」「形象読み」「主題読み」をめぐって

WHAT IS "READING" FOR US FOREIGNERS?

How to Read "Structure," "Imagery," and "Theme" of STORIES

寺 島 隆 吉

TERASIMA, Takayosi

- 1 はじめに
- 2 なぜ「形象読み」ではなく「構造よみ」を優先するか
- 3 「形象読み」における「線引き」の位置
- 4 「物語の構造」「物語の文法」とは何か
- 5 「構造読み」は「手段」か「目的」か
- 6 「線引き」以前に英文を「直読直解」できる力を
- 7 教科書編集者の「構造読み」は正しかったのか
- 8 教材としての英語版『窓ぎわのトットちゃん』

NOTES

REFERENCES

APPENDIX

1 はじめに

私の主催する英語教育の研究会（JAASET：Japan Association of Applied Semiotics for English Teaching, 略称「記号研」）が2005年に開催した「夏の研究集会」で、会員の一人（寺田義弘氏）が、大西忠治が創始した「科学的『読み』の授業研究会」（いわゆる「読み研」方式）による「線引き」について発表した。研究集会のあと、氏は記号研「掲示板」で次のように感想を寄せた。以下、それについて若干のコメントをしながら、「英語にとって「読み」とは何か」を考える糸口にしたい<註1>。

昨日まで部活大会、学習合宿、英語教師集中講座が連続して入り、大会の感想が遅れました。あまり話し合いの時間がありませんでしたので、この掲示板にて、私の「形象読み」について先生方のご意見を頂ければ嬉しいです。

結局、大西の「形象読み」の真骨頂である「線引き」については、今回あまり先生方に興味を持っていただけませんでした。しかし記号研が大西の追実践を研究課題に決めた以上、そして「構造読み」が三読法の第1段階に過ぎない以上、第2・3段階についてもきちんと「方法」を確立すべきではないでしょうか？

「構造読み」をする段階の中で必然的に「形象読み」が必要になるというのが、記号研実践者の統一した意見のような気がしましたが、「構造読み」の目的は「課題を見つけること」「この文章は、何をベースに話が展開するか」であると薄井正道氏が『大西忠治ノート』でもおっしゃっていたかに思います。

またテスト作成、授業中の発問作成において、「何を読ませるか」「どこをよませるか」が教師の勤にたよっているという批判が始まりで、「読み研」がスタートして国語科の読み指導を「科学的に」変えるように活動していると思っていますが、多くの場合、英語科も同じというのが現状です。

追伸：現在、国語科の「読み研」のメーリングリストに入れてもらい助言を頂いています。するとあの英文「トットちゃん」は「記録文」とであるという指摘を受けました。二学期は、まず①説明文 ②記録文と教材が続くので今勉強中です。その後、メルマガに報告したいと思います。

なお記号研「掲示板」での寄稿を中心にこの論考は成り立っている。その意味では、この論考は記号研会員および会員外のメンバーとして途中で場外から討論に参加することになった中学校国語教師IH氏との共著といってもよいものである。いちいち名前をここに記さないが、ここに改めて謝意を表明しておきたいと思う。特に一種の「叩き台」になってくれた寺田氏には格別の謝意を捧げたいと思う。と同時に、この論考を機に英語教師としての力量をいっそう高めてくれるものと期待している。

2 なぜ「形象読み」ではなく「構造よみ」を優先するか

上記の投稿について私は次のような返事を書いた。以下に再録する。<< >>で囲まれている部分が私の返事である。

<<まず第1に、「記号研が大西の追実践を研究課題に決めた以上、そして『構造読み』が三読法の第1段階に過ぎない以上、第2・3段階についてもきちんと『方法』を確立すべきではないでしょうか？」という意見について私見を述べます。

確かに「構造読み」が三読法の第1段階に過ぎない以上、第2・3段階についてもきちんと「方法」を確立すべきだと思います。しかし、記号研の実践は、第1段階の「構造読み」すら、追試がきちんとされていないのが現状だと思います。少なくとも私は、寺田さん自身の追試報告すら眼にしていません。どこかに報告されたものがあるのでしょうか。

今までに私が眼にしている実践報告は寺島美紀子『英語授業への挑戦』、野澤裕子『授業はドラマだ』、山田昇司『授業は発見だ』に載せられているものだけのような気がします。私自身は『記号づけ入門』（授業の工夫シリーズ第1巻）で『大きなかぶ』について「構造読み」→「主題読み」につ

いて小論を書きましたが、これは実践報告ではありません。

第2に『『構造読み』をする段階の中で必然的に『形象読み』が必要になるというのが、記号実践者の統一的な意見のような気がしましたが、…』という点についてです。もし寺田さん自身がこのように思っておられるのであれば、研究会で発表された「Utsukushii Is Beautiful」という教材の「構造読み」をせずに、何故いきなり「線引き」の実践を発表されたのでしょうか<註2>。

『『構造読み』をする段階の中で必然的に『形象読み』が必要になる』のですから、何よりも先ず「構造読み」が先行すべきはずで、大西忠治の実践記録（大西1988）を見ても、「線引き」は「山場の部」、とくに「クライマックス」の部分を読み込むために、徹底的に「線引き」をしているように思いました。なぜなら、「山場の部」を決定することが、そしてその「クライマックス」を読み込むことが、「主題」を読むことに直結するからです。

また上記の教科書教材「Utsukushii Is Beautiful」が原文と違って不完全である恐れがあるから「構造読み」をせずに「形象読み」に移ったとすれば、それも大きな問題ではないでしょうか。もし上記の教材が「構造読み」をするに値しない教材であるならば、同じように「形象読み」にも値しないのではないのでしょうか。原文とは大きな構造に変化がなくても、肝心な部分が省かれている恐れがあるからです。

したがって、むしろ少々、教材が原文とは違っている可能性があったとしても、「構造読み」こそ挑戦してみるべき課題だったのではないかと思います。なぜなら寺島美紀子『英語授業への挑戦』に載せられているCROW BOYの分析は、以前の「夏の研究集会」で参加者が山口書店版「CROW BOY」の構造読みを挑戦した議論の記録でもあるからです。そして、その議論の中から山口書店版の不備が解明されていったのでした。というのは、議論すればするほど英文のおかしさ、段落構成のおかしさが明らかになり、それで原文を取り寄せて比較してみた結果、生まれたのが上記の論文だったからです。

ですから、上記の教科書教材「Utsukushii Is Beautiful」も徹底的に構造読みをすれば、この文章も「どこが原文と違っているのか」「そのような書き換えは何故おかしなのか」などが、議論の中で自然と明らかになったかも知れないのです。もちろん、この教科書教材を教室で「構造読み」の教材として取り上げる前に、原文と比較しておくということは、教師として当然やっておくべき作業だったとは思いますが、それをしなかったとしても、CROW BOYの時と同じような発見があったかも知れないからです。

第3に、「『構造読み』の目的は『課題を見つけること』『この文章は、何をベースに話が展開するか』であると薄井正道氏が『大西忠治ノート』でもおっしゃっていたかに思います。」という点についてです。私見によれば、「構造読み」は単に「この文章は、何をベースに話が展開するか」を見つけることだと思いません。そうではなく、「構造」をめぐって議論するうちに「形象」を読まざるを得なくなり、「山場」や「クライマックス」の確定を巡って議論しているうちに半ば「主題」の議論に自然と踏み込んでいくからこそ、「構造読み」の意義があるのです。

もし薄井正道氏が『大西忠治ノート』で主題読みの意義を上記のように限定しているとすれば、彼は、大西さんの意図や願いを完全に読み違えているのだと私は確信しています。晩年の大西さんは癌の苦痛に耐えながら原稿の最後の校正にエネルギーを集中していましたから、薄井さんの原稿の全てにきちんと眼を通す暇がなかったのではないかと推察されます。あの『大西忠治ノート』は、ひょっとして大西さんの死後に刊行されたのではないのでしょうか。あとで確認してみたいと思っています<註3>。

最語に「現在、国語科の『読み研』のメーリングリストに入れてもらい助言を頂いています。するとあの英文『トットちゃん』は『記録文』であるという指摘を受けました。」という点についてです。英文「トットちゃん」であろうが、原文「トットちゃん」であろうが、それを「記録文」とあるとい

う指摘は全くの驚きです。恐らく大西さんがこれを聞いたら、「読み研」の水準の、余りの低下に嘆き悲しむのではないのでしょうか<註4>。また原作者の黒柳徹子さんも『トットちゃん』が「説明的文章」＝「記録文」だと国語教師が分類しているのを聞くと激怒するのではないかと思います。

私自身は原作『トットちゃん』は極めて香り高い文学作品だと思っています。そもそも「自伝」というのは「説明的文章」＝「記録文」だと分類されているのでしょうか。それとも広義の意味での「文学作品」として分類されているのでしょうか。私は明らかに後者だと思っています。『チャップリン自伝』を中野好夫が翻訳したとき、彼はそれを「説明的文章」＝「記録文」だと思いながら翻訳したのでしょうか。私にはとてもそうは思えません。ゴッホの「自画像」が他の作品と同じように立派な芸術であると同じように「自伝」も立派な文学作品です。

長くなりましたので、この辺でコメントを止めておきます。大西忠治『説明的文章の読み方指導』も参照していただければ幸いです。その中の「記録文」として取りあげられている教材は、むしろ自然科学の教材に近いものであったと記憶しています。しかし、それにしても観察記録文として有名なファブル『昆虫記』ですら、今では文学作品の範疇に入りそうな雰囲気を持っているのは何故なのでしょう。研究してみたい課題です。>>

私が以上のような返事を寺田氏に書いたら、さらに氏から次のような返事が届いた。ただし[]は文意が取りやすいように私が補足したものである。

拝復、下記の件について簡単なコメントで失礼します。申し訳ありませんが、[先生の]記憶違いだと思います。夏のレポートにあるとおり、構造読みしなかったのは、教科書で、セクションではじめから分かれているからで、「原文との確認したのか」という問には、「確認していません」と[研究会の場で]答えたつもりです。

そこで私は早速、次のような返事を書いた。<< >>で囲まれた部分が私の返事である。<<言われてみれば、そうかもしれません。しかし、そうだとすれば次の疑問が湧いてきます。Q1：教科書の英文が四つのセクションに分けてあったとしても、それは単に分量的に均等に四つに分けてあったのではないか。Q2：一步ゆずって「起承転結」の四部に分けてあるように見えても、本当にその分け方で良かったのか自分で検証してみる必要がありはしないか。Q3：さらに一步ゆずって教科書の四分分割が正しかったとしても、そのセクション区分を取り払った英文を生徒に「構造読み」させる実践があっても良かったのではないか。(生徒は英文全文を見て、どこにセクションの切れがあったかを指摘できるほど、英文を正確に覚えているだろうか。また覚えていた生徒がいたとしても、「教科書の切り方が正しいという保証がどこにあるのだろうか」と問いかければ良い。)

以上のように考えると、やはり「構造読み」抜きの「線引き」は無理があるように思います。また「どこを線引きするか」は教師の主観と力量に大きく左右されるので、「線引き」の実践は今のところ余りお奨めできないと私は考えています(自己訓練のために自分で「線引き」をやってみるのは大いに結構でしょう)。

ですから、「構造読み」の実践を徹底的に推し進めて、それでも飽き足りなくなったときに初めて生きてくる実践ではないのでしょうか。取り急ぎ、思いついた点のみにて失礼します。>>

3 「形象読み」における「線引き」の位置

上記のようなやり取りをメールでおこなっていたのだが、これは個人的なやり取りだけでは惜しいと考え、寺田氏に記号研「掲示板」で公開したらどうかと提案した。というのは、このような往復書

簡は同じような問題に関心をもつ教師に大いに参考になると思ったからである。すると「掲示板」上で下記のような寺田氏からの続編が載せられていた(下線は寺島による)。

構造読み・寺島先生とのやりとり(8) 投稿者：寺田 投稿日：9月10日(土)

ありがとうございます。大変勉強になりました。今週末にでも整理して、掲示板に載せておきます。「構造読み」を軽視するつもりは全く無く、構造読みに関しては、以前夏の大会で「構造読みへの挑戦」(1997)で報告しました。詳しい実践報告ではありませんでしたが。それ以後も、時間の許す時に行っています。今年英I、5単位が3単位になってしまい、とても難しい状況ですが。

形象読みに興味を持ったのは、「発問づくり」の観点からです。私の力量を超えているかもしれませんが、全ての教員がテスト作りの際に避けては通れない問題で、日々の授業でも訳を超えた次元での「読み取り」という意味で重要な課題であると思います。

「記録文」、「文学作品」の区分ですが、「記録文」として、扱うことで「描写」と「説明」の基礎訓練となることには、少し興味を持ちました。さすがに「トットちゃん」は、私にも「文学作品」ですが、「ジャッキー・ロビンソン」は、「記録文」でもいいかなと思ってしまいます。生徒に「みたまま記録」と「まとめ記録」の違いを説明することの方が、教材価値があるように思われます。

今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

構造読み・寺島先生とのやりとり(9) 投稿者：寺田 投稿日：9月10日(土)

今朝、掲示板にのせておきました。先生の「別便」は断りなく先生のHPにリンクを張らせて頂きましたが、よろしかったでしょうか？貼り付けながら、もう一度読み返しましたが、前回の先生のメールの また「どこを線引きするか」は教師の主観と力量に大きく左右されるので、「線引き」の実践は今のところ余りお奨めできないと私は考えています。という先生の文が気になりました。なぜなら、大西が「読み研」で求めたものは、まさにこの点で、「教師の主観」と「力量」で左右されるのがまずいという視点で、いかにこの点を「科学的」にできるかだったのではなかったかと思うからです。

「構造読み」は説明的文章では次段階の「要約」「要旨」を導くための手段であり、物語的文章においても、第一段階のアウトラインの把握であり、次段階としては「形象読み」がある。それは、場面に応じて、「線引き」を「主観」と「力量」に左右されない方法(導入部の4要素、それ以降の3要素)で行い、特に山場・終結部の形象読みはさらに深い次元で読みが要求され(2次形象・3次形象)、「題名読み」も絡めて「主題読み」と呼ぶ一大西の文献を読んで私はこのように理解しました。

この点では薄井氏の読み取りと同じです。国語科の三読法とは文字通り、3ステップで読むことで、この3ステップを「科学的」というのではないかとも思うのです。(国語科では「一読総合法」という3読法以外のものもあるようです。)

先生の文献を今更ですが、本日『記号づけ入門シリーズ』に発見しました。先生が助教授時代に書かれた「国語科教育との統合」という文章です(先日の私の掲示板投稿タイトルと名前の偶然の一致にビックリしました)。その中で、「『形象読み』についてお知恵をお聞かせ下さい。」という文章を偶然に発見してしまいました。

この時点で、構造読みの実践がどれほど進んでいたのかは知りませんが、一応、今年の夏の大会の報告の導入部の4つ①時②場所③人物④事件設定 それ以降は①時・場所の変化②新しい登場人物③「心情の変化」と「特徴ある行動」④文体というのが、私のこれに対する意見ということになります。

ちなみに、「掲示板の投稿タイトルと偶然に一致した」という「国語科教育との統合」に関する寺田氏の投稿は次のようなものであった。

「国語科教育との統合」ということで、以下の実践を行いまとめようと思います。「読み研」の実践の英語科での追試です。どなたか一緒にやりませんか？

1) 物語的文章の読み方

- ①構造読み・・・4つに分ける。クライマックスの文を見つける。
- ②形象読み・・・導入部では4つの読みとり（時・場所・登場人物・事件設定）。それ以後は、3つの読みとり（事件の発展・人物像の深化・文体）。ただし、事件の発展・人物像の深化の概念が難しく、私は「心情」「特徴的な行動」に代えた。（発問作りの視点からも研究課題である。）
- ③主題読み・・・読み手が決めるか、作者のメッセージが読みとれるか。

2) 説明的文章の読み方

- (1) 記録文の読み方（描写と説明、文学的文章を読む時の訓練にもなる。）
 - ①構造読み・・・説明文・みたまま記録・まとめ記録の区分と時中心の把握
 - ②要約読み・・・みたまま記録をまとめ記録に変える。
 - ③要旨読みは必要ない。
- (2) 説明文・論説文の読み方（説明を聞いた時に、整理する力の育成）
 - ①構造読み・・・3つに分ける。序論・本論・結論
 - ②要約読み・・・柱の段落・柱の文とそうでない文を区分、柱の文で要約とする。
 - ③要旨・論旨読み・・・（勉強中）

さて以上の投稿に関して私は次のように返事を書いた。<< >>で囲まれた部分が私の返事である。<<寺田さんは先ず下記のように述べています。

また、「どこを線引きするか」は教師の主観と力量に大きく左右されるので、「線引き」の実践は今のところ余りお奨めできないと私は考えています、という先生の文が気になりました。なぜなら、大西が「読み研」で求めたものは、まさにこの点で、「教師の主観」と「力量」で左右されるのがまずいという視点で、いかにこの点を「科学的」にできるかだったのではなかったかと思うからです。

大西さんの意図が、<文章の読みが「教師の主観」と「力量」で左右されるのがまずい><いかにこの点を「科学的」にできるか>だったことは確かです。しかし、大西さんは、この点を完成させずに他界されました。どこに線引きするかは氏の『文学作品の読み方指導』を何度読み返しても理由がはっきりしないところがあります。したがって大西さんの「線引き」はまだ完成品ではないと私は考えています。

晩年の大西さんは、「線引き」を誰にでも分かるようにする努力をする代わりに自分の全集を完成することに全エネルギーを傾注して他界されました。そのことを私は非常に残念に思っています。全集などという仕事は、「漱石全集」などを見れば分かるように、死後にその著作に価値があるのであれば、放置しておいても必ず誰かがやってくれるものです。ですから私は大西さんには生きているうちに氏にしかできない仕事をしてほしいと生前中から思っていました。

現在の「読み研」がどのような研究成果をあげているのか、残念ながら勉強不足で知らないのですが、すくなくとも『トットちゃん』を「記録文」と分類するようでは、余り進展していないのではないかと推察しています。もし寺田さんが知っている研究成果があるのであれば、教えていただけると有り難いと思います。

第2に、「線引き」が主観と力量に左右されないのであれば、既に寺田さんの報告で引用されていた教材「ジャッキー・ロビンソン」の「線引き」も、わざわざ「読み研」の先生に依頼するまでもなく、自力で出来たのではないのでしょうか。ところが寺田さんは、既にメールの第1信で次のように書

かれています。

また、「形象読み」についてですが、読み研の人に以下の文で試しに引いてもらいました。ただ、私はこの文は「記録文」として扱うつもりです。「描写」と「説明」について少し勉強したので「まとめ記録」と「みたまま記録」の実践をしたいからです。（形象読みの「発問」の下線引きに私自身、自信が持てないこともあります。）

また記号研「掲示板」(2005年9月7日)でも下記のように書かれています。このように、寺田さんですら、＜事件の発展・人物像の深化の概念が難しく、「心情」「特徴的な行動」に代えた＞と言っておられるのですから、こんな作業をどうして生徒に要求できるのでしょうか。

②形象読み・・・導入部では4つの読みとり（時・場所・登場人物・事件設定）。それ以後は、3つの読みとり（事件の発展・人物像の深化・文体）。ただし、事件の発展・人物像の深化の概念が難しく、私は「心情」「特徴的な行動」に代えた。（発問作りの視点からも研究課題である。）少なくとも今の私には、「事件の発展」「人物像の深化」だけでなく「文体」というものも十分に分析する力量はありませんから、これを授業でやらせてみようとは思いません。日本語ですらできないことを英語でやることは、なおさら想像できません。しかし私のHPに載せてある「別便」論文でも書いたように、「構造読み」→「主題読み」ならできる自信があります。

第3に冒頭で紹介した記号研「掲示板」(9月10日)で次のように書かれている点も気になります（特に下線部）。

「構造読み」は説明的文章では次段階の「要約」「要旨」を導くための手段であり、物語的文章においても、第一段階のアウトラインの把握であり、次段階としては「形象読み」がある。それは、場面に応じて、「線引き」を「主観」と「力量」に左右されない方法（導入部の4要素、それ以降の3要素）で行い、特に山場・終結部の形象読みはさらに深い次元で読みが要求され（2次形象・3次形象）、「題名読み」も絡めて「主題読み」と呼ぶと、大西の文献を読んでわたしは理解しました。

これでは私がせっかく「別便」論文で書いたことを全く読んでいないのではないかとすら思います。というのは、「構造読み」は説明的文章では単なる次段階の「要約」「要旨」を導くための手段ではないからです。

説明的文章の「構造読み」は文章の論理矛盾を追及する武器にもなっていますし、論理的に段落を追って書く訓練にもなっています。だからこそ、それだけを取りあげて実践する意味があるのです。単に次段階の「要約」「要旨」を導くための手段ではないのです。

同じく物語的文章においても、「構造読み」は第一段階のアウトラインの把握に終わるものではありません。何度も言うように「構造読み」はそれを追求することによって自動的に「形象読み」「主題読み」に導かれていきます。それは実践したことがある人なら誰でも実感していることですし、寺島美紀子『英語授業への挑戦』にも詳しく書かれているはずですが。

寺田さんは上記で、＜「線引き」を「主観」と「力量」に左右されない方法（導入部の4要素、それ以降の3要素）で行い＞と書かれています。既に検証したように＜事件の発展・人物像の深化の概念が難しく、私は「心情」「特徴的な行動」に代えた＞と言っているわけですから、少なくとも寺田さんの現在の力量では、＜事件の発展・人物像の深化＞には取り組めないことを認めているわけです。

とはいえ、「心情」「特徴的な行動」というものも、私には曖昧な概念で、何を「特徴的」と判断するかは「主観」と「力量」に左右されるように思います。しかし、このような抽象的な議論は不毛なので、具体的な作品分析で示していただいた方が、会員の読者にも分かりやすく、授業でもすぐに役立つのではないのでしょうか。

私には「2次形象・3次形象」という読みも、大西さんの『文学作品の読み方指導』を読んだ限り

ではよく理解できませんでした。私が「大西さんは仕事を未完成のまま他界された」と言うのは、このような意味を込めて言っているつもりです。それとも、氏の死後、「読み研」は、この分野でも大きな前進をしているのでしょうか。もし、そうであれば、そのような文献の紹介をしていただいた方が、会員にとっても得るところが大きいのではないのでしょうか。

最後に述べておきたいことは、英語教育の場合、先ず何よりも「一文ずつの読みの力をいかにつけるか」「直読直解の力をいかにつけるか」かが焦眉の課題です。ところが記号研の多くの実践がまだ「記号の付いたプリント」をいかに読ませるかのレベルに止まっています。

生徒に記号を付けさせながら直読直解をさせていく実践は、今年(2005)の夏の研究会で戸梶邦子さんが「四角の数を段落毎に指示しながら記号づけをさせる」という試みを提示してくれただけで(他にも岩井志子『授業はトキメキ』の実践はあるが)余り例がありません。ましてDiscourse Markers に記号づけさせながら直読直解させる実践は皆無です<註5>。

このような実践を抜きに、「形象よみ」や「線引き」についてだけを論じても何か空しいものを感じます。というのは多くの生徒にとっては、何よりも先ず英文を早く正確に読む方法が何よりも必要だからです。ですから寺田さんは、そのような実践があるのであれば、メルマガを通じてでも、それを先ず皆に公開して欲しいと思います。

私がこのように思うようになったのは、既に寺島美紀子『直読直解への挑戦』で「茅ヶ崎方式」に対する詳細な分析と批判が書かれているにもかかわらず、記号研の会員に「茅ヶ崎方式」で自己研修をしているひとがいたり、國弘正雄「只管朗読」方式→千田潤一「英語ぜったい音読」方式の弱点ついて私が機関紙で書いているにもかかわらず、会員でそのような実践をしているひとがいることに驚いたからです。

記号研方式は単に低学力の生徒の為だけにあるものではありません。教師がまず自分の英語力をつける武器として存在しています。そのことは既に昨年、戸梶邦子さんが全英連大阪大会で記号研の実践報告をされたときに強調されたことでもありました。この点に確信を持たない限り、本当の意味で生徒に自信を持って記号研方式を薦めることはできないのではないのでしょうか。

(蛇足ですが、寺島美紀子も高校教師をしていた頃に「津田塾大学の学生だった頃は英語を学び続けることに絶望したが、「記号づけ」に出会って初めて英語を読む見通しと自信が湧いてきた」と私に語ってくれたことがあります。)>>

以上のコメントを書いた後に大西(1988)『文学作品の読み方指導』を読み直してみた。すると次のように書かれている箇所を発見した。

実際、この線引きが正しいか、適当か、客観的であるかどうかは、私にしても断定的にいえるものではない。不必要なところに線引きをし、必要なものを落としているかもしれない。あるいは、もっと多く引くべきかもっとすくなくおさえて引くべきかも、絶対にこうだ、といきれるわけではない。私といっしょに、私のように文学作品を読もうとしている教師たちが、みんないうのは「線引きのむずかしさ」である。「線引きが断固としてやれるようになると一人前だ」ということである。(1988:119)

つまり寺田氏は、<「どこを線引きするか」は教師の主観と力量に大きく左右されるので、「線引き」の実践は今のところ余りお奨めできないと私は考えています、という先生の文が気になりました。なぜなら、大西が「読み研」で求めたものは、まさにこの点で、「教師の主観」と「力量」で左右されるのがまずいという視点で、いかにこの点を「科学的」にできるかだったのではなかったかと思うからです>と書いているが、当の大西氏自身が「線引きの難しさ」を上記のように語っているのである。また「線引き」の指導手順についても次のように述べている。

ところで、具体的な授業では、かならずしも、生徒の線引き→はなしあい→線引きの場所の決定

→形象読み…という手順をすべてふんでいく必要はない。私は、最初は、教師が自分で線引きをしたものを、そのまま、生徒に与えて、教師の線引きを、教科書の上で写させて、その部分を形象読みしていく。そして、形象読みが、何となく理解できるようになったところで、生徒に線引きをやらせて、はなしあいするというこゝでいいと思う。その場合、作品によっては線引きだけで終わって、形象読みを省くという場合も、低学年ではあっていい。ただ、先程もいったように、線引きを先にやるのではなく、やはり形象読みをやって、形象読みをぼんやりとでも理解させたうえでないと、線引きはできにくい。(1988: 121-122)

さて、「線引き」は、教材研究のための教師の線引きだけが重要なのではない。生徒たち自身に線引きさせることは、もっと重要である。そして、これも経験的にそういえることで、けっして理論的な説明ではないのだが、例えば、このページに三か所線引きの場所があるよと生徒たちに指示して、線引きをやらせてみると、ほとんど、七〇パーセントから八〇パーセントくらいの率での中する。考えてみると、形象読みする必要はあるし、形象読みできそうなところと、読めば、それだけでわかるし、それ以上深く読む必要がない部分は、何度か線引きさせているうちに、何となく読み分けられるようになるものだからである。(1988: 120)

ご覧の通り大西氏も、先ず教師があらかじめ「線引き」をしたプリントを配布し、生徒に「形象読み」の訓練をさせた後で、生徒による「線引き」へと移行しているのである。また、その際、このページでは「線引き」が何個あるかを指示しながら作業させているのである。

これは先ず「記号づけ」されたプリントを配布し、生徒が記号の意味を理解した上で、今度は英文に自力で記号づけさせていく私たちの手順と似ている。

また生徒に自力で英文に記号づけさせる場合でも、漠然と記号づけさせるのではなく、既に戸梶実践や岩井実践でおこなわれているように、記号の数を例えば「四角は三個」などと指示しながら記号づけをおこなわせた方が、思考が活性化し、班や教室で討論するときも、漠然と記号づけさせた場合よりも討論が活発化する。

4 「物語の構造」「物語の文法」とは何か

ところで寺田氏あてに返事を書いた数日後に再び氏から次のような疑問が投稿された。〈 〉が寺島からの引用で、その後述べられているのが寺田氏の疑問・意見である。ここに引用するに当たって読みやすくするため「寺島」「寺田」という語句を補った。

寺島先生へ 投稿者： 寺田義弘 投稿日： 9月14日(水)

寺島先生のHPを読んだので疑問点をあげます。

寺島<現在の「読み研」がどのような研究成果をあげているのか、残念ながら勉強不足で知らないのですが、すくなくとも「トットちゃん」を「記録文」と分類するようでは、余り進展していないのではないかと推察しています。もし寺田さんが知っている研究成果があるのであれば、教えていただけると有り難いと思います。>

寺田：ある作品を「物語」として読むか、「記録文」として読むかですが、そもそも物語は、記録文的要素を含んでいるのが普通で、あとは、その教材の「教材としての価値」が決める気がします。それは、「構造読み」に適する文と、適さない文があると言っていることと同じで、教育的価値で教師が決めてよいのではないのでしょうか？大西の『説明的文章の読みかた』の中にも、「文学的要素が濃い記録文」などのような表現を何か所かで見えた気がします。トットちゃんを「記録文」と分類したとするより、「記録文として扱っても良い教材となる。」という意味だと思います。(「読み研」の人の名誉のために)

寺島<第2に、「線引き」が主観と力量に左右されないのであれば、既に寺田さんの報告で引用されてい

た教材「ジャッキー・ロビンソン」の「線引き」も、わざわざ「読み研」の先生に依頼するまでもなく、自力でできたのではないのでしょうか。>

寺田：「深化」と「発展」の意味が、分かりにくいということでお願いしました。大西氏の「線引き」が未完成だとは、全く思いもしませんでした。私の国語力のなさで理解が曖昧で、英語科への応用が出来ないのかと思い、実際をお願いしてみました。

寺田くまた記号研「掲示板」(2005年9月7日)でも下記のように書かれています。このように寺田さんですら、「事件の発展・人物像の深化の概念が難しく、「心情」「特徴的な行動」に代えた」と言っておられるのですから、こんな作業をどうして生徒に要求できるのでしょうか。>

疑問・意見：この指摘は意味が分かりませんでした。「発展」「深化」と説明しても分かりにくいので、「心情」「特徴的な行動」として線引きをやらせてはどうだろうかという提案だったので。

寺田く説明的文章の「構造読み」は文章の論理矛盾を追及する武器にもなっていますし、論理的に段落を追って書く訓練にもなっています。だからこそ、それだけを取りあげて実践する意味があるのです。単に次段階の「要約」「要旨」を導くための手段ではないのです。>

寺田：「構造読み」それだけを取り上げても意味があるのは、良く分かっているつもりです。ただ「しばって読む」ということを教える場合は、どうでしょうか？ 人の話を聞いてそれをまとめる力などは、この「しばって読む」訓練が必要ではないですか？そして絞り込むために、まず「構造を押さえる」という考えはどうでしょうか？私の読書力では（大西の文献からは）大西のしてきたことは、そういう風に読めてしまうのでしょうか？

上記の疑問に対して『チョムスキー教育論』の校正・解説の仕事に追われていた私は、下記のような簡単な返事だけを掲示板に載せた。

<<寺田さんから下記のような疑問・反論が寄せられています。しかし今は『チョムスキー教育論』の校正・解説の仕事に追われていますので、ゆっくり回答できません。そこで次の3点だけ指摘するにとどめます。詳細な私論の展開は別に論文のかたちでまとめて提示したいと思いますので、もう少し時間をください。

1 「物語の構造」の研究はウラジミール・プロップがロシア民話の構造を研究して、その成果を1929年に発表して以来、長い研究の歴史がある。今では「物語の文法」という研究分野すら現れている。

ジャンニ・ロダーリ (1990)『ファンタジーの文法—物語創作法入門』筑摩書房

ジェラルド プリンズ (1996)『物語論の位相—物語の形式と機能』松柏社

2 大西忠治は中学校の国語教師として、上記のような研究とは無関係に、授業の必要に迫られて独自の研究と実践をすすめてきた。その到達点が「構造読み」「形象読み」「主題読み」であった。それは日本の国語教育界では極めて個性的で創造的なものであった。しかし上記の研究成果をふまえて、もう一段の深化が必要かも知れない。

3 今は詳しい説明を省くが、<文学作品は「主題読み」が到達点であることはもちろんであるが「構造読み」は独自の意義がある>とする私の意見は変わらない。

4 説明的文章の「構造読み」については拙著『英語にとって学力とは何か』で朝日新聞「天声人語」や「英語道」の提唱者・松本道広の文章などを例にして詳細な分析を加え、同時に「構造読み」の意義と方法について論じてあるので、それを参照されたい。

いずれにしても、具体的な作品分析や授業実践を抜きに議論を続けても、実践経験のない一般会員には余り興味がないものかも知れません。次回に論じるときには、その点を考慮したものになりたいと

思っています。>>

時間がなかったので、上記のような簡単なコメントしか書けなかったのだが、いま読み返してみると、上記<3>は、<今は詳しい説明を省くが、“文学作品は「主題読み」が到達点であることはもちろんであるが説明的文章の「構造読み」はそれ独自の意義がある”とする私の意見は変わらない>とし、更にくむしろ文学作品の「構造読み」をさせないで、いきなり「線引き」させることの方が問題ではないか。大西も決してそんな実践をしていないはず>という語句を補っておくべきだったと考えている。

また上記<1>の文献だけでなく、ジェラルド プリンズ『物語論辞典：増補版』（遠藤健一/訳、松柏社、1997）のような辞典も出版されていることも付け加えておくべきだったかも知れない。というのは、この辞典の紹介を兼ねて松岡正剛は次のように物語の構造を説明しているからである。以下、氏のHP[<http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya1005.html>] から若干を引用する。というのは、大西忠治が中学校の国語教師として、上記のような研究とは無関係に、授業の必要に迫られて独自の研究と実践をすすめてきた内容が、いかに水準の高いものだったかを示したいからである。

ただし、このジェラルド・プリンズによる世界初の物語辞典はプロップ、トドロフ以来のナラトロジーのさまざまな成果をごっちゃにして、単にアルファベティカルに並べたものなので、用語はバルトのものもグレマスのももジュネットのもも混在する。また、プリンズには物語構造を統一的に記述する方法のようなものは確立していないし、これをリクールやグレマスやジュネットらの別のナラトロジストに求めても統一感はないので、ここでは、ぼくが勝手に説明のコンシステンシーをつくっておいた。

物語の本質は広い意味での「紛糾」(complication)である。その解きほぐしと解決(resolution)である。そのため大半の物語構造は多くの階層や部分や要素でできあがっているのだが、それだけでは物語は機能しない。そこで、そうした物語素(classeme)を相互につなげるための連結(linking)、連接(conjoining)、埋め込み(embedding)、交替(alternation)、協和(consonance)、混合(interweaving)、合成(compound)、入れ子(nesting)などの"関係付け"が必要になる。また、それぞれのプロットの並べ方を縫い合わせる手法が要求される。

ここではプロップ、トドロフ、グレマス、ジュネットなどの「物語の構造」を研究してきた先人が列挙されているが、大西は研究者としてではなく中学校の国語教師・実践家として、授業の必要に迫られて「構造読み」「形象読み」「主題読み」を追求してきた。松岡が<物語の本質は広い意味での「紛糾」(complication)である。その解きほぐしと解決(resolution)である>と述べているところは、大西が「主題読み」は「山場の部」とりわけ「クライマックス」を読み取ることであり、「クライマックス」とは「矛盾」「紛糾」が「破局から解決へ」または「解決から破局へ」の転換点である>と述べていることと見事に照応している。以下に松岡からの引用を続ける。

こうして、これらを総合して物語構造(narrative structure)がある。一般的な物語構造は、

- 1) ストーリー (プロット, スクリプト, エピソード)
- 2) キャラクター (character)
- 3) シーン (scene)
- 4) ナレーター (全知的・遍在的)
- 5) ワールドモデル (世界・原世界・異世界)

によって普遍的に構成されている。このうちの1つが欠けても物語とはなりえない。なかでもキャラクターは物語を最も見えやすくも見えにくくもするもので、しかも時代によって劇的な変遷をとげてきた。(中略)けれども物語構造はそのほかのことからも成り立っている。そのひとつが「テキスト相互関連性」(intertextuality)で、バフチンやクリスティヴァによって強調された。

このばあいのテキストとは、物語を構成している適当な長さの読解単位レクシ (lexie) のことをいう。テキストの節そのものが物語の構造要素である。

このように、物語は複雑な入れ子構造を持つが、大西はそれを読み取るための技術として「形象読み」を提唱し、それを「導入部」では4つの読みとり(時・場所・登場人物・事件設定)、それ以後は、3つの読みとり(事件の発展・人物像の深化・文体)として定式化したのだった。これは上記の観点で言うと、1) ストーリー(プロット、スクリプト、エピソード)、2) キャラクター(character)、3) シーン(scene)などに相当する。

ここで特に面白いのは、松岡が「このうちの1つが欠けても物語とはなりえない」と言いつつ、「なかでもキャラクターは物語を最も見えやすくも見えにくくもするもので、しかも時代によって劇的な変遷をとげてきた」と述べている点である。これは大西のいう「登場人物」「人物像の深化」に当たるもので、「人物形象」の読みがいかに難しいかを述べているものだと言えよう。また大西の言う「文体」と上記で松岡が「テキスト相互関連性」(intertextuality)の照応も非常に興味深いものがある。

しかし、既に述べたように、大西は研究者ではなく現場の教師であったから、上記に述べられているような物語の構造(1-5)の全てを知ったうえで実践していたわけではない。私が先に、<大西は研究と実践の途上で他界した、したがって大西の「形象読み」「線引き」は未完だと私は考えている>と述べたのは、以上のような事情による。

5 「構造読み」は「手段」か「目的」か

ところで私が寺田氏の「掲示板」記事(9月14日)に先述のような簡単なコメントを書いた数日後に再び寺田氏から下記のような意見が寄せられた。そこで以下に再録して私見を展開することにした。そのことによって「構造読み」の問題が更に明らかになると思うからである。

構造読みについて 投稿者：寺田義弘 投稿日：9月16日(金)

「構造読み」に対する理解がどうも、じっくりこないで、私見を述べさせていただきます。

大西氏は、『文学作品の読みの指導』の中で、最初のページに「小説の指導として構造読みが単独にあるわけではない。私の考え、実践している「構造読み」は文学作品の指導方法の第一段階を意味しているのである。・・・(3読法の)全体構想の最初の段階に位置づけて初めて構造読みと呼び得るわけである。・・・だから「構造読み」という読み方指導が独立的にあるわけではないことを、はじめにとくにお断りしておきたいのである。」と述べています。

これはやはり、薄井氏が『大西ノート』に書いてあるとおり、大西氏の「構造読み」は3ステップの第1段階に過ぎず、「通読」を意味するのではないのでしょうか。

さらに13ページで、「構造は全体を把握することによってはじめて可能なのであるから・・・つまり最後になって分かるのである。してみれば文章における「構造読み」というものがあるとすれば、それは読みの最終段階だといえることができる。しかし、この考えは理性的でない。・・・しかし読む前に構造は知っているということが可能である。小説の構造は、こういうセオリーをもっているということが分かっている場合、作品全体が分かっているなくても、ここが冒頭、ここが発端と考えながら読むことが可能である。こういう読み方を私は理性的な読みと考える。」と述べています。

つまりこの文から大西氏の「構造読み」は最初に「発端」、次に「クライマックス」「山場の始まり」、最後に「結末」の点を意識しながら読み進めて「通読」することなのではないかと私は読み取りました。

71ページには「重要なことは、構造読みを、構造読みの授業の段階において完結しないことである。決定しないままで形象読み、主題読みへ進んでいくことが重要である。」とあり、さらに「われわれが作品を読

むのは、作品の構造を知りたいためではない。形象や主題を読みとることが目的なのである。作品構造の読みとりは、そのための一つの段階である。作品構造の理解が主題の読みとりの助けとなるからである。主題を読みとったあとでは、構造などどうでもいいのである。」と述べています。

やはり大西氏の「構造読み」は薄井氏の『大西ノート』のとおり、3ステップの第1段階と見る方が正しい気がします。つまり、おおざっぱに構造を「わしづかみ」にするという表現が正しいと思うのです。

寺島先生の「構造読み」は「構造を把握する中で、読むべき形象・主題が見えてくる」だから、「はじめに構造読みありき」と読みとれました。同じことを言っているのかなと私も思いましたが、大西氏が上記のように述べていることを考えると、大西氏は「構造読み」を「手段」としている点、寺島先生が「構造読みそのものに意味があり、構造読み抜きの「形象読み」「主題読み」は考えられない」とする点で何か根本的なところでの相違を感じました。

簡単に言うと、大西氏の「構造読み」は3読法の第1段階の「通読」を科学的にしたものであり、記号研の「構造読み」は「精読」のための武器となっていると思うのです。この点で、根本的なところで、異なる実践となっているような気が私にはするのです。

もしかしたら、記号研がやっている「構造読み」そのものを3つの段階に「科学的」にするために分解したとすることができるのではないかとすら私には思えるのです。みなさんのご意見をいただければと思います。

まず第1に、寺田氏は『文学作品の読みの指導』の最初のページを引用しつつ、<これはやはり、薄井氏が『大西ノート』に書いてあるとおり、大西氏の「構造読み」は3ステップの第1段階に過ぎず、「通読」を意味するのではないでしようか>と、私の意見に異を唱えている。

しかし既に何度も述べているように私は「通読」「精読」「味読」のいわゆる「三読法」に異を唱えたことはない。私の論は<「構造読み」は「山場の部」「クライマックス」の確定をめぐって必然的に「形象読み」「主題読み」を導き出す>であって、文学作品の読みで「構造読み」がそれだけで完結するなどと言ったことはない。

第2に、寺田氏は同じく『文学作品の読みの指導』の13ページを引用しつつ、<やはり大西氏の「構造読み」は薄井氏の『大西ノート』のとおり、3ステップの第1段階と見る方が正しい気がします。つまり、おおざっぱに構造を「わしづかみ」にするという表現が正しいと思うのです>と述べている。

しかし、私は「構造読み」を「三読法」の第1段階ではないと主張したことは一度もない。むしろ私が主張したことは、寺田氏が「構造読み」を省略して、いきなり「線引き」「形象読み」を生徒にさせたことが問題だと言うことであつた。なお寺田氏が<13ページ>と述べたところをいくら探しても、引用の該当箇所を見つけることが出来なかった。少なくとも私の手元にある初版本では、該当箇所は11ページだった。

第3に、寺田氏は同じく『文学作品の読みの指導』の71ページ（ただし私の初版本では62ページ）を引用しつつ、<やはり大西氏の「構造読み」は薄井氏の『大西ノート』のとおり、3ステップの第1段階と見る方が正しい気がします。つまり、おおざっぱに構造を「わしづかみ」にするという表現が正しいと思うのです>と述べ、さらに次のように結論づけている。（下線は寺島）

寺島先生の「構造読み」は「構造を把握する中で、読むべき形象・主題が見えてくる」だから、「はじめに構造読みありき」と読みとれました。同じことを言っているのかなと私も思いましたが、大西氏が上記のように述べていることを考えると、大西氏は「構造読み」を「手段」としている点、寺島先生が「構造読みそのものに意味があり、「構造読み」抜きの「形象読み」「主題読み」は考えられない」とする点で何か根本的なところでの相違を感じました。簡単に言うと、大西氏の「構造読み」は3読法の第1段階の「通読」を科学的にしたものであり、記号研の「構造読み」は「精読」のための武器となっていると思うのです。この点で、根本的なところで、異なる

る実践となっているような気が私にはするのです。

しかし、上記の下線部を逆にすると、<寺島は「構造読み」を「手段」ではなく完結した「目的」とし、他方、大西は「構造読み」抜きの「形象読み」「主題読み」はあり得ると考えている>ということになるが、寺田氏がそのように私や大西の叙述を読んだとしたら、寺田氏の読みの力とは何かと私は思わず考え込んでしまう。少し考えただけでも大西が「構造読み」抜きの「形象読み」「主題読み」を是としたものを読んだことがないし、他方、寺島隆吉(1991)や寺島美紀子(1990)のどれを見ても「構造読み」で終わっている記述はないはずである。

もし寺田氏にそのような誤解を与えたとすれば、野澤(2002)、山田(2005)、岩井(2006)などの実践記録が「構造読み」の討論が主であり、「形象読み」「主題読み」の討論がきちんと書き込まれていないことがあるのかも知れない。しかし、野澤(2002)第3章「文章全体の読みを支えるもの」を丁寧に読めば分かるように、「反復」「対比」を中心とした「形象読み」はきちんとおこなわれているし、「主題読み」も「クライマックス」の理由を問うというかたちで、生徒は間接的に「主題」を考えるように追い込まれているのである。ただし、今後は、「形象読み」「主題読み」が明確になるような典型教材とモデル授業書づくりが求められていることは確かである。

なお「形象読み」にかかわって、大西が『文学作品の読みの指導』で、次のように「反復」「対比」(大西の言葉では「対応」「照応」その他の概念について述べていることは注目に値する(1988:128)。というのは、これらは私が既に何度も述べたように、大西の「線引き」「形象読み」がまだまだ発展途上であったことを示しているように思われるからである。私が「大西は著作集の出版に命を削るのではなく別のところに残された命を注ぐべきではなかったか」と考える所以である。

私は二次形象の指導において、形象相互の「対比」と「対応」の二つの概念を使って読みとりをおしすすめることを実践的な問題として重視したいのである。そして、ここでは例としてあげなかったが、「対比」と「対応」の他に「照応」もつけ加えたいと思う。このことは、線引きの場合とくに重要である。「この部分は、対比ではないか、だから線引きとしてのこしたい」というふうな討論、はなしあいがある有効なのである。

「対比」反対の内容をもったものをくらべて読むこと

「対応」同じ傾向、同じ方向、同じような内容をもったものをかねあわせて、それがどういう意味をもっているかをひき出してくる読み

「照応」対比・対応と明確にはいえないが、形象相互のあいだに何らかの関係があり、形象相互の間にひびきあうものがあり、そのひびきあいのなかで、何か新しい意味が導き出せそうな場合

ところで、二次形象の導入のための指導上の概念として右の三つ以外に、更にいくつかの重要な概念、カテゴリーが導入されなくてはならないと思う。例えば「伏線」「暗示」(あるいは西郷竹彦氏を中心に研究であきらかにされている「視点」もその一つかもしれない)などの概念の有効性なども、もうすこし実践的な検討をしなくてはならないと思う。

このことについては、私は、ここですべて述べつくすことはしないで、実践家たちへの課題として残しておきたい。ただそういう概念を生徒たちが駆使して二次形象の読みを深めていくことは、実践上有効なことはたしかである。そして、これらの概念は、すべてを即座に与えねばならないわけではない。それは学年における順序性がある。それについてもまだ、実践上の検討は残されていると思う。

上記の寺田氏「掲示板」記事(9月16日)が載ってから更に数日後に、戸梶氏から「夏の研究会」について下記のような感想が「掲示板」に寄せられた。それを最後に紹介して、この項を終えることにしたい。

というのは、「一文一文の読み」から「文章全体への読み」へと教師の実践が移行・発展していく様子が読み手によく伝わってきて、これから「読み」の実践してみようと思うひとに大きなヒントを与えてくれるように思うからである。

2005年「夏季研修会」に参加して 投稿者：戸梶邦子 投稿日：9月21日(水)

もう1ヶ月が過ぎました。

昨年の夏、1つ1つの英文を理解するために記号をつけることは記号づけの入り口であり、記号づけを利用して英文全体の構造を読んでいく「構造読み」をすることを寺島先生から教えていただきました。できるかな？という不安（私自身がそのような読み方をしたことがない）と、おもしろそうだな、という思いを持ちながら、昨年の2学期以降、3年生のリーディングの授業で、受験用の問題集でやってみました。

昨年は河合塾から出版された本（パラグラフリーディングのストラテジー）を参考にして取り組んでみました。ディスコースマーカーに注目することを生徒に示しながら読んでいきましたが、要約すること、要旨をつかむことについては日本語でやりました。

最初のころは生徒も喜んで取り組みましたが、途中から要約については配布した全訳を見てするようになりました。ディスコースマーカーが意味していること、要約については宿題にして、授業で答えを確認する形を取りましたが、要約の部分は宿題をしないで、授業中に配布した全訳を見ながら答えるという状況になりました。

今年の研修会で、寺田先生の報告とそれをめぐっての討論を聞きながら分かったことがありました。私の昨年の授業は「構造読み」をしていたのではなくて、ディスコースマーカーの持っている意味を取っただけにすぎないこと。「構造読み」をするのはまず典型的な文章から始めること。それから後で私の報告を聞いていただいた後のやりとりでわかったことは、要約をするのは英文ですること。

今年の7月の末、新英研の〈読みとり〉の分科会に出席して、文芸研の文学の読み取りの方法を使った実践を聞きました。文芸研というのはこのとき始めて知ったのですが、大変面白いと思いました。が、「読み研」の方法とは違うらしいということがわかり、少し混乱していました。今も解決しているわけではありませんが。

実は「読み研」というのも寺田先生のレポートで始めて知りました。夏休みの終わりに、文芸研の西郷竹彦、読み研の大西忠治の本を大急ぎで何冊か読んで見ました。今も読んでいる最中です。

これを書きながら、決定的に私が間違っていたことに気がつきました。「構造読み」をするためにディスコースマーカーを使うのであって、昨年の私は逆にディスコースマーカーを使って「構造読み」をしようとしていたのです。

今年は1年生の英語Ⅰがあるので、1学期に記号付けで1つ1つの英文を読んでいく方法を取り、2学期からは構造読みを試みたいと思っていたので予定通りやってみようと思っています。さいわい最初のLessonが典型的な説明文だったので、すでに1つ終わりましたが。

それにしても、段落にわけるときの分け方の論理等、私自身に読みとりの力が必要なことを痛感しています。要約、感想文は英語で書かせることにしました。初めて参加して、私にとって大変実りある研修会でした。遅くなりましたがありがとうございました。

6「線引き」以前に英文を「直読直解」できる力を

さて寺田氏と以上のようなやり取りをしているうちに、寺田氏が指導を受けている「読み研方式勉強会メーリングリスト」のIH氏から便りが届いた。ただし仮名IHで紹介している関係で、差しさわりのある箇所は一部だけ省略した。またスペースの関係で改行も少し変えさせてもらった。引用英文も分かりやすくなるように(1)－(3)のように番号を加えた。

寺田義弘さんの参加している「読み研方式勉強会ML」について

投稿者：IH, 投稿日：10月2日(日)

寺島先生、初めまして。この掲示板で寺田義弘先生が触れられている読み研メーリングリストを管理人をしているIHと申します。

私は、中学校で国語を担当しているのですが、授業の進め方の一つとして「読み研方式」を取り入れています。寺田先生が、読み研方式を英語に取り入れようとなさっていらっしゃることをメーリングリストで知りました。そこで、英語の先生方がどのように読み研方式を取り入れていらっしゃるのか、寺田さんにご紹介していただきたいというお願いをしたところ、実際の英文などをご紹介いただきました。その中で、トットちゃんなどの教材について教えていただきました。最初寺田さんは、トットちゃんを物語教材として、構造よみをしたあと、どこに線引きをするのか、このメーリングリストに参加している国語を専門としているメンバーにお尋ねになりました。その中で、私は、記録文としてこの教材は読めないだろうかという私見を述べたわけです。

もともと、私が、読み研方式勉強会メーリングリストを個人的に立ち上げましたのは、読み研方式の公的メーリングリストや掲示板などがなく、それでも読み研方式についての情報交換をしたいと思ったからです。読み研の運営委員の加藤郁夫さんからのメールにありますとおり、IHが一個人として運営しているメーリングリストであるということをお断りしておきます。メーリングリストのURLは、以下の通りです(中略)。

寺田さんから「Utsukushii Is Beautiful」の英語の原文をご紹介いただきました。寺田さんからは、上にも書きましたように、物語の構造読みが終わった後、どこに線引きをするのかという質問がなされました。

私は、寺田さんの質問には直接答えず、記録文ではないかということと、記録文だとすると読み研では「事実よみ」を授業の読みの中心課題にするということ、どんな「事実よみ」をするのか、私見を以下のように述べたわけです。〔それを以下に再録します〕

〈読み研メーリングリストでの私の発言記録〉

私のリクエストに早速、寺田さんから英語の物語をご紹介いただきありがとうございました。久しぶりに英文を読みましたので、内容のつかみきれないことを承知で、寺田さんに、この英文が日本語ならどのように読み研の国語教師は授業化するか、私見を述べます。みなさんも、わりこみ発言をお願いします。

まず、寺田さんはこの話を物語として読まれています。私は、一読した限りでは、黒柳徹子さんが子どもの時通っていた「ともえ学園」に転入生が入園してきたときの話、つまり「記録文」として把握した方がいいのではないかと考えます。読み研では、フィクション(文学作品)であるのか、説明的文章であるのかによって、読み方が変わります。

次に、たぶん寺田さんは、小説の構造よみをこの作品に当てはめて、形象読みへと授業実践を進められたと思います。もし、記録文なら、構造よみの方向は「時」を中心に構造把握へと進みます。そして、読みの中心課題は「事実よみ」となります。さて、私の「事実よみ」として考えたい点を、最初の段落の中から上げてみます。

(1) A new student arrived at Tomoe Gakuen..

- ・「A new student」が「Tomoe Gakuen」にやって来た。
- ・「Totto-chan」は、たぶん幼稚園生ではないかとおもうのだが、「student」(学生)が「Tomoe Gakuen」に入学してくるのだろうか。(「Tomoe Gakuen」は、どんな年齢層の子どもを受け入れる学校なのか)
- ・いつやって来たのか、時代も、月も書かれていない。
- ・「Tomoe Gakuen」とは、どんな学園なのか説明もない。
- ・記録文の初めとしては、情報量が少ない。
- ・本当は、もっと長い話があって、その中からとりだして教材化した話なのか、原典にあたる必要があるかも。

(2) He was big and tall for a primary school boy.

- ・ここも上の疑問と関わって、「大きく背の高い彼は、「Totto-chan」と同年代なの」それとも「アメリカからやって来た彼を、受け入れる学校は「Tomoe Gakuen」しかなかったの、入園したのか」
- ・「Tomoe Gakuen」とは、私立の幼稚園生から高校生くらいを一緒に受け入れている学校なのか。
- ・もし、彼が「Totto-chan」と同年代だとすると、栄養をたくさんとれるアメリカから来たので成長が進んだということなのか。(Miyazakiという苗字からすると、日本人の血が流れていると思われるので、そんなに大きく成長するとは思えない)
- ・「for a primary school boy」(小学生にしては)ということは、「彼は小学生なのか」

(3) Totto-chan thought he looked more like a junior high school student.

- ・「Totto-chan」がいきなり登場している。「Totto-chan」の視点が出てくる。
- ・「Totto-chan」が、語り手？
- ・「he looked more like a junior high school student」(more likeとは、中学生以上に見えたということなのか)

では、また。〈引用終了〉

私は、直感的に記録文として読むと「表面をなぞる読み取りではなく、深層の読みが引き出せるのではないか」と感じて、私の「事実よみ」の教材分析を提示しました。物語として構造読みをするのと、記録文として構造読みすることでは、構造の把握の仕方が大きく違います。

物語として読む場合は、読み研では「導入部・展開部・山場の部・終結部」の4部構造で把握します。もちろん山場の部の中の「クライマックス」はどこかということも把握します。もし物語として読むとして「クライマックス」をどこにするかという、私は、次の部分だと考えます。

"Akachan is baby," he began.

They all repeated after him. "Akachan is baby."

"UtsuKUSHII is beautiful." Miyazaki stressed the "ku."

"UtsukuSHII is beautiful," repeated the others.

Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?"

このあたりは、宮崎君とともえ学園の子どもたちとの英語と日本語の偏見のない学び合いの様子が描かれていると感じます。英語の先生方は、この「Utsukushii Is Beautiful」という英文をどのように構造読みなさるのかということをお聞きできれば、大変ありがたいです。的はずれな書き込みになってしまいましたら、お許しください。

上記の便りに対して私は後で述べるような返事を書いた。しかし、その議論を読んでもらう前に、この議論の対象になっている教材「Utsukushii Is Beautiful」をまず紹介しておく必要があるだろう。さもないと、今後の議論を読んでも、いま一つ実感が湧かないのではないかと考えるからである。以下がその教科書教材の原文である。

Utsukushii Is Beautiful

1. A new student arrived at Tomoe Gakuen. He was big and tall for a primary school boy. Totto-chan thought he looked more like a junior high school student.

2. That morning in the school ground the headmaster introduced the new student.

"This is Miyazaki. He was born and brought up in America. He doesn't speak Japanese well, but he's very good at English. You can learn a little English from him. He's not used to life in Japan,

so you'll help him, won't you? And ask him about life in America. He's one of you now.

3. Miyazaki bowed to his classmates. They were much smaller and younger than he was. And all the children bowed back.

4. At lunchtime Miyazaki went over to the headmaster's house, and all the others followed him. When they saw him walking into the house with his shoes on, all the children shouted, "You have to take off your shoes!"

5. Miyazaki looked surprised. "Oh, excuse me," he said, and took them off. The children began telling him what to do.

"You have to take your shoes off for rooms with tatami-mat floors. You can keep them on in the classrooms and in the library."

It was fun to learn about the difference between living in Japan and living abroad.

6. The next day Miyazaki brought a big English picture book to school. All the children gathered around him to look at the book. They were amazed. It was such a beautiful picture book.

7. In the book there were lots of colors besides the standard twenty-four in a box of crayons. It was so big and printed on such lovely, thick, shiny paper.

8. Miyazaki read the English book to the children. They were fascinated with his English. This was certainly something new and different.

"Akachan is baby," he began.

They all repeated after him. "Akachan is baby."

"UtsuKUshii is beautiful." Miyazaki stressed the "ku."

"UtsukuSHII is beautiful," repeated the others.

9. Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?"

10. Miyazaki and the other children soon became good friends. Every day he brought various books to Tomoe and read them to the others at lunchtime. It was pleasant to hear him reading those English books.

11. Miyazaki was their English teacher. At the same time, he became a better speaker of Japanese. He also stopped making mistakes like sitting in the tokonoma.

12. Totto-chan and her friends learned lots of things about America. Japan and America were becoming friends at Tomoe. But outside Tomoe, America was an enemy. English was considered an enemy language and was no longer taught in most schools.

13. "Americans are devils," the Japanese government announced. But at Tomoe the children kept saying in chorus, "Utsukushii is beautiful." And the breezes across Tomoe were soft and warm, and the children themselves were beautiful.

この教材が載せられている教科書では既に四つのセクションに分けられていたが、ここではそのセクション分けは無視して機械的に教科書の段落分け通りに番号を振るにとどめた。その方が、この文章を読者が自力で「構造読み」してみるのに良いと思ったからである。

それはともかく、IH氏の便りに対して私は以下のような返事を書いた。<< >>が私の返事である。また< >で囲まれた部分がIH氏からの引用部分である。

<<お便り有難うございました。以下にI Hさんのお便りを引用しつつ、簡単に私の意見を述べさせていただきます。

＜寺田さんから「Utsukushii Is Beautiful」の英語の原文をご紹介いただきました。寺田さんからは、上にも書きましたように、物語の構造読みが終わった後、どこに線引きをするのかという質問がなされました。私は、寺田さんの質問には直接答えず、記録文ではないかということ、記録文だとすると読み研では「事実よみ」を授業の読みの中心課題にするということ、どんな「事実よみ」をするのか、私見を以下のように述べたわけです。＞

これを読んで、まず第1に私が驚いたのは「高校の英語教師」が「中学校の国語教師」に「英語の原文」についての「線引き」を頼んだという事実でした。「トットちゃん」の日本語原文について「線引き」を依頼したというのなら、まだ納得いくのですが、日頃から英文を読み慣れていないはずの国語教師に英文の読みを依頼するというのに、どれだけの意味があるのか、私には全く理解に苦しむ行為でした。

英語教師が国語教材について分析するのであれば、母語が日本語ですから作業は比較的容易です。なぜなら英語教師も教材の背景を知るために多量の日本語を読んでいるわけですから（日頃から深い読みをしている教師なら）国語教師よりも深い読みができる英語教師は幾らでもいます。しかし逆の場合、かなり困難な作業になります。中学校の英語教師でも高校の英語教材となると、よほど日頃から英文を読んでいる教師でないと、高校の英語教材を読みこなせるとは限らないからです。

したがって、私が国語教師であれば、よほど自信がないかぎり英文の「線引き」はお断りすると思うのです。その代わりに日本語の原書『トットちゃん』の「線引き」ならやってみましょう、と答えたいでしょう。ところが貴氏は、あの名著『トットちゃん』を読んだことがないように見えるのです。これが第2の驚きでした。しかも氏はこれを「記録文ではないか」と返事をされたというのですから、更に驚きが倍加しました。だからこそ堪りかねて加藤郁夫氏（科学的「読み」の授業研究会・事務局次長）から、＜「読み研のメーリングリスト」というのがどのようなものかはわかりませんが、少なくとも私たちの会が正式に運営するものではありません＞とのお便りがあったのではないのでしょうか。

第3に、もちろん国語教師でも英語の得意な人がいても不思議ではないのですから、その「線引き」に挑戦することがあっても良いと思いますが、以下に見るとおり、その英語の読み方は、失礼な言い方になって申し訳ないのですが、「線引き」以前だと思われました。

＜「A new student」が「Tomoe Gakuen」にやって来た。「Totto-chan」は、たぶん幼稚園生ではないかとおもうのだが、「student」（学生）が「Tomoe Gakuen」に入学してくるのだろうか。（「Tomoe Gakuen」は、どんな年齢層の子どもを受け入れる学校なのか）＞

上記の文で、「Totto-chan」がくたぶん幼稚園生ではないか＞との推測が私にとっては大きな驚きでした。「Totto-chan」は「小学生」のはずなのに何故「student」（学生）という単語が出てくるのだろうか、という疑問を抱かれたのであれば、まだ納得できるのですが、貴氏はくたぶん幼稚園生ではないかとおもうのだが＞と書かれています。こんな読み方でどうして「線引き」が可能なのでしょう。

＜He was big and tall for a primary school boy. ここも上の疑問と関わって、「大きく背の高い彼は、「Totto-chan」と同年代なのか」それとも「アメリカからやって来た彼を、受け入れる学校は「Tomoe Gakuen」しかなかったのか、入園したのか」。「Tomoe Gakuen」とは、私立の幼稚園生から高校生くらいを一緒に受け入れている学校なのか。もし、彼が「Totto-chan」と同年代だとすると、栄養をたくさんとれるアメリカから来たので成長が進んだということなのか（Miyazakiという苗字からすると、日本人の血が流れていると思われるので、そんなに大きく成長するとは思えない）。「for a primary school boy」（小学生にしては）ということとは、「彼は小学生なのか」＞

上記の英文も、あれこれ自問するほどの難しい英文だと思えません。「彼は小学生にしては背が高かっ

た」ということが読み取れさえすれば、こんな長々しい分析は全く必要ないでしょう。また文章というものは文脈でも読むわけですから、Totto-chan thought he looked more like a junior high school student. と併せて読めば、「(小学生よりも)むしろ中学生のようにみえた」のですから、その新入生が「小学生」であることは、ますます明らかです。

それにもかかわらず、貴氏は、<「he looked more like a junior high school student」(more likeとは、中学生以上に見えたということなのか)>と書かれています。このような英文の読み方で、どうして「線引き」が可能になるのでしょうか。だからこそ、私は寺田さんに「形象読み」以前に、「構造読み」の実践をするよう勧めたのです。それどころか、大学を出て国語教師をしている大人ですら、上記のような読み方をしているのですから、記号づけされた英文を直読直解する力を生徒につけることが先決ではないか、とすら思えるのです。

最後の部分で貴氏は次のように書かれています。これも私にとっては不思議な叙述でした。というのは、何故 <記録文として読むと「表面をなぞる読み取りではなく、深層の読みが引き出せる>のかという点です。「物語」「文学作品」こそ「深層の読み」を引き出すのに最適の教材ではないでしょうか。

<私は、直感的に記録文として読むと「表面をなぞる読み取りではなく、深層の読みが引き出せるのではないか」と感じて、私の「事実よみ」の教材分析を提示しました。>

さらに貴氏は次のようにも述べられています。この叙述も私には実に奇妙なものに思われました。というのは、記号研は下記のようなことは既知のこととして実践しているからです。それは拙著『英語にとって学力とは何か』、寺島美紀子『英語学力への挑戦』、野澤裕子『授業はドラマだ』などで明らかなことだからです。

<物語として構造読みをするのと、記録文として構造読みするのでは、構造の把握の仕方が大きく違います。物語として読む場合は、読み研では「導入部・展開部・山場の部・終結部」の4部構造で把握します。もちろん山場の部の中の「クライマックス」はどこかということも把握します。>

もし私が記号研「掲示板」に便りを書くとか、寺島隆吉という人物に便りを書く場合、その研究会がどんな研究をしている組織か、その人がどんな論文や本を書いている人かを調べた上で便りを書きます。ですから加藤郁夫氏(科学的「読み」の授業研究会・事務局次長)に返事を書く場合にも、一応、氏がどのような人かをインターネットなどで調べた上で返事を書きました。

それに反して上記の貴氏の叙述は、記号研が(あるいは寺島隆吉という人物が)「構造読み」について初心者だとも読めるような書き方になっています。これでは「読み研」で鍛えられているはずの、「ふくらまして読む」「深層の読み」の力が全く育っていないことを示してはいないでしょうか。

<もし物語として読むとして「クライマックス」をどこにするかということ、私は、次の部分だと考えます。

"Akachan is baby," he began.. They all repeated after him. "Akachan is baby." "UtsuKUshii is beautiful." Miyazaki stressed the "ku." "UtsukuSHII is beautiful," repeated the others. Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?"

このあたりは、宮崎君とともえ学園の子どもたちとの英語と日本語の偏見のない学び合いの様子が描かれていると感じます。>

この部分を「クライマックス」とする読みについても正直言って驚きを禁じ得ませんでした。ということは、IH氏は、この章に込めた黒柳徹子氏の願い(主題)を全く理解できなかったということを示しているように思えるからです。これでは「主題読み」が成立するはずありません。

つまり、「山場の部がどこか」「クライマックスはどこか」を読み違えると、「主題読み」も成立し

ないのです。だからこそ私は、「構造読み」は同時に「主題読み」を内包すると何度も主張しているのです。

それにもかかわらず、寺田さんのHPを見る限り、「形象読み」「線引き」のみに比重を置いた実践をされているように見えます。だからこそ、貴氏から逆に、＜英語の先生方は、この「Utsukushii Is Beautiful」という英文をどのように構造読みなさるのかということをお聞きできれば、大変ありがたいです＞という質問が記号研「掲示板」に寄せられることになるのです。

しかし、この質問は記号研「掲示板」にするべきではなく、まず英文「トットちゃん」を授業で実践された寺田さんにこそ尋ねるべきでした。そして先ず寺田さんこそが自分の構造読み（私案）を提示して、井上氏や記号研「掲示板」で皆の意見を聞くべきだと思うのです。

時間がありませんので、全くの走り書きになってしまいました。冒頭にも述べたとおり、時間ができたら、詳しい説明を書き加えたいと思っています。>>

7 教科書編集者の「構造読み」は正しかったのか

私がIH氏に対して上記のような寸評を書いたら、IH氏から次のような返事が氏自身のHPに掲載された。まず、それを紹介してから、私のコメントを書くことにする。氏の掲示板では私からの引用を四角で囲んであることになっているが、ここでは<>で囲んである。また私によるIH氏からの引用は[]とした。

私の掲示板への書き込み記録（2） 投稿者：IH 投稿日：10月10日(月)

私の掲示板への書き込みに対して、寺島隆吉氏からコメントをたくさんいただきましたので、私のコメントを述べさせていただきます。掲示板での寺島隆吉氏の論文の引用を四角で囲んでその後に私のコメントを書く形にします。

<まず第1に私が驚いたのは「高校の英語教師」が「中学校の国語教師」に「英語の原文」についての「線引き」を頼んだという事実でした。「トットちゃん」の日本語原文について「線引き」を依頼したというのであれば、まだ納得いくのですが、日頃から英文を読み慣れていないはずの国語教師に英文の読みを依頼するというところに、どれだけの意味があるのか、私には全く理解に苦しむ行為でした。

英語教師が国語教材について分析するのであれば、母語が日本語ですから作業は比較的容易です。なぜなら英語教師も教材の背景を知るために多量の日本語を読んでいるわけですから、日頃から深い読みをしている教師なら、国語教師よりも深い読みができる英語教師は幾らでもいます。しかし逆の場合、かなり困難な作業になります。中学校の英語教師でも高校の英語教材となると、よほど日頃から英文を読んでいる教師でないと、高校の英語教材を読みこなせるとは限らないからです。したがって、私が国語教師であれば、よほど自信がないかぎり英文の「線引き」はお断りすると思うのです。その代わりに日本語の原書『トットちゃん』の「線引き」ならやってみましょう、とお答えしたでしょう。>

寺田さんが、読み研方式勉強会MLで「英語の原文」についての「線引き」を頼んだことに意義があるのか、ないのかというご指摘ですが、私が寺田さんの立場に立って考えると、「英語の原文」についての「線引き」を頼んだのは、次のような理由が背景にあったのではないかと推測します。それは、寺田さん自身が「線引き」をどのようにしたらよいのかよくわからないことと、その寺田さんがなされた「線引き」の適否についての教材研究が英語の研究会の中であまり深められないことの2点ではないでしょうか。もし、英語の研究会で寺田さんの「英語の教材の読み研方式による教材研究」について十分な情報交換が成立しているようでしたら、寺田さんが国語の読み研方式勉強会MLに参加なされたいとは思わなかったのではないのでしょうか。

ですから、寺田さんが私の個人的な読み研方式勉強会MLにご参加されたのは、読み研方式勉強会MLは国語の読み方指導の情報交換のためのメーリングリストであることを十分ご承知の上で、それでも少しでも英語の教材研究に役立てたいとお考えになったからだとは私は理解しています。そういうことを背景に寺田さんの依頼があったのだと思います。

次に、寺島氏が「したがって、私が国語教師であれば、よほど自信がないかぎり英文の「線引き」はお断りすると思うのです。その代わりに日本語の原書『トットちゃん』の「線引き」ならやってみましょう、とお答えしたでしょう」とおっしゃるとおり、私があえて「記録文としてトットちゃんの英語の教材文の事実よみの教材分析」を私見として発言したのは、英文の線引きをお答えできないけれども、私個人の教材分析としてご提示できることをまとめてみたわけです。(それでも、英語について堪能でない国語教師が「記録文としてトットちゃんの英語の教材文の事実よみの教材分析」を私見として発言するのも問題ということならば、そのことの是非については述べないことにします。)

また、トットちゃんの原文はどうなっているのか、図書館からかりてきて、「Utsukushii Is Beautiful」の出典の「英語の子」の部分の文書を、私は参考資料としてメーリングリストでご紹介しました。メーリングリスト上では、私の「記録文としてトットちゃんの英語の教材文の事実よみの教材分析」発言だけで、具体的な英語の教材の線引きについては話題になりませんでした。

<[もし物語として読むとして「クライマックス」をどこにするかという、私は、次の部分だと考えます。]

"Akachan is baby," he began.. They all repeated after him. "Akachan is baby." "UtsuKUshii is beautiful." Miyazaki stressed the "ku.." "UtsukuSHII is beautiful," repeated the others. Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong.. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?"

このあたりは、宮崎君とともえ学園の子どもたちとの英語と日本語の偏見のない学び合いの様子が描かれていると感じます。]

この部分を「クライマックス」とする読みについても正直言って驚きを禁じ得ませんでした。ということは、IH氏は、この章に込めた黒柳徹子氏の願(主題)を全く理解できなかったということを示しているように思えるからです。これでは「主題読み」が成立するはずもありません。つまり、「山場の部がどこか」「クライマックスはどこか」を読み違えると、「主題読み」も成立しないのです。だからこそ私は、「構造読み」は同時に「主題読み」を内包すると何度も主張しているのです。>

私のとらえた「クライマックス」の部分に対して、寺島氏は上記下線部のように否定的な見解を述べています。

さて、構造よみのクライマックスをどこにするのかという実際の授業の有効性が感じられます。というのは、寺島氏は「私のとらえたクライマックスは、クライマックスではない。違う部分が、クライマックスである」という対立意見をお持ちです。そうすると、実際の授業では、私のクライマックスと寺島氏のクライマックスとの対立が議論されるわけです。

寺島氏は、冒頭で「いずれ時間が取れたら詳しく私見を展開するつもりです。」と述べられていらっしゃいますので、寺島氏のクライマックスはどこで、なぜそこがクライマックスなのか、具体的に論じていただけるのではないかと楽しみです。この部分では、寺島氏は「この章に込めた黒柳徹子氏の願(主題)」は、私のクライマックスの部分にはないということだけしか、反論の理由を述べられていませんので、私の考えるクライマックスの根拠を先に整理してご提示します。

この「Utsukushii Is Beautiful」の主要な事件を構成する二つの勢力は、「ともえ学園の子どもたち」と

「Miyazaki」くんだと考えます。

「ともえ学園の子どもたち」…日本の文化・生活を教える勢力。また、アメリカの文化・生活を学ぶ勢力。

「Miyazaki」…日本の文化・生活を学ぶ勢力。また、アメリカの文化・生活を教える勢力。

ともえ学園に転校してきたアメリカからやって来た「Miyazaki」くんと「ともえ学園の子どもたち」との偏見のない交流の様子が、生き生きと描写されているのが、「"Akachan is baby," he began. They all repeated after him. "Akachan is baby." "UtsuKUshii is beautiful." Miyazaki stressed the "ku." "UtsukuSHII is beautiful," repeated the others. Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?」のだと考えます。

クライマックスでの勢力の逆転は、初めは「ともえ学園の子どもたち」が「Miyazaki」くんに日本の文化・生活を教えていたが、英語の絵本を通して「Miyazaki」から英語を学ぶ立場に逆転。反対に、「Miyazaki」くんは、「ともえ学園の子どもたち」から日本の文化・生活を学んでいたが、英語の絵本を通して「ともえ学園の子どもたち」に英語を教える立場に逆転。二つの勢力が、それぞれ立場が逆転するという面白いユニークなクライマックスだと感じます。つまり、「ともえ学園」においては、子どもたちはそれぞれの持ち味を生かして学んでいるという「教育の理想像」が形象化されているのではないのでしょうか。

「Totto-chan and her friends learned lots of things about America. Japan and America were becoming friends at Tomoe. But outside Tomoe, America was an enemy. English was considered an enemy language and was no longer taught in most schools.. "Americans are devils," the Japanese government announced.. But at Tomoe the children kept saying in chorus, "Utsukushii is beautiful." And the breezes across Tomoe were soft and warm, and the children themselves were beautiful.」

上の部分にも、対立する勢力があります。

「outside Tomoe」…アメリカを敵と考える勢力。英語は教えないし、アメリカ人は「devils」とみなす戦時中の日本の社会（政府）。大多数の日本人を代表する勢力。

「at Tomoe」…アメリカを敵とは考えないし、英語も自由に学べて、アメリカ人も日本人も同じ仲間（He's one of you now.）と考える勢力。ともえ学園を代表する「the headmaster」の独自性・先見性・個性尊重思想・人間愛。

この部分の意義付けは、「戦時中という時代背景にも影響を受けないともえ学園の永遠性」を、後話として述べる役割をしていると考えます。

また上記のIH氏の意見が氏のHPに掲載される数日前に記号研「掲示板」には寺田氏による「トットちゃん」の構造読み（案）が公開されていた。そこで、それをも紹介した上で、両者に対する私見を述べることにする。

トットちゃんの構造読み（寺田案） 投稿者： 寺田義弘 投稿日：10月 5日(水)
寺島先生の指摘の通り、構造読み（寺田・私案）を載せます。ほとんど 英語 I 教科書『ニューコスモス I』の区分け通りです。

1 A new student arrived at Tomoe Gakuen. He was big and tall for a primary school boy. Totto-chan thought he looked more like a junior high school student.. That morning in the school ground the headmaster introduced the new student. "This is Miyazaki. He was born and brought up in America. He doesn't speak Japanese very well, but he's very good at English. You can learn

a little English from him. He's not used to life in Japan, so you'll help him, won't you? And ask him about life in America. He's one of you now." Miyazaki bowed to his classmates. They were much smaller and younger than he was. And all the children bowed back.

以上が導入部

2 At lunchtime Miyazaki went over to the headmaster's house, and all the others followed him. When they saw him walking into the house with his shoes on, all the children shouted, "You have to take off your shoes!" Miyazaki looked surprised. "Oh, excuse me," he said, and took them off. The children began telling him what to do. "You have to take your shoes off for rooms with tatami-mat floors. You can keep them on in the classrooms and in the library." It was fun to learn about the difference between living in Japan and living abroad.

以上が展開部

3 The next day Miyazaki brought a big English picture book to school. All the children gathered around him to look at the book.. They were amazed. It was such a beautiful picture book.. In the book there were lots of colors besides the standard twenty-four in a box of crayons. It was so big and printed on such lovely, thick, shiny paper. Miyazaki read the English book to the children. They were fascinated with his English. This was certainly something new and different. "Akachan is baby," he began. They all repeated after him.. "Akachan is baby." "UtsuKUSHii is beautiful." Miyazaki stressed the "ku.." "UtsukuSHII is beautiful," repeated the others.. Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?"

4-1 Miyazaki and the other children soon became good friends. Every day he brought various books to Tomoe and read them to the others at lunchtime. It was pleasant to hear him reading those English books. Miyazaki was their English teacher. At the same time, he became a better speaker of Japanese. He also stopped making mistakes like sitting in the tokonoma.

以上が山場の部

4-2 Totto-chan and her friends learned lots of things about America. Japan and America were becoming friends at Tomoe. But outside Tomoe, America was an enemy. English was considered an enemy language and was no longer taught in most schools. "Americans are devils," the Japanese government announced. But at Tomoe the children kept saying in chorus, "Utsukushii is beautiful." And the breezes across Tomoe were soft and warm, and the children themselves were beautiful.

以上が終結部でいいと思います。

クライマックスは私も井上さんと同じ、セクション3の最後 Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?"だと思います。ここから、緊張した宮崎と生徒達の関係が急激に、become freindに変わるわけですから。

主題読みは、山場と終結部の形象読みの延長と題名読みで行い、クライマックスから「相互理解」の大切さ、最後の「文体が成立している」And the breezes across Tomoe were soft and warm, and the children themselves were beautiful. の文から、「米国と日本は外見・形は異なるが、そんなことを気にしない子ども達の姿は、美しい」「トモエ学園の方針は美しい」などがあがれば良いのではないのでしょうか？

さて以上の意見について私は次のようなコメントを書いた。<< >>が私のコメントである。先ず、それを紹介した上で補足説明を付け加えることにする。ただし寺田氏からの引用部分における下線は寺島による。

<くいま私は緊急に仕上げなければならない仕事山積して、ゆっくり丁寧に寺田&IH氏案について私見を展開している時間はないので、次の2点のみを取りあげて、コメントするだけに止めます。以下に示すく >は寺田さんとIH氏からの引用です。

<クライマックスは私もIHさんと同じ、セクション3の最後 Miyazaki then understood that his Japanese pronunciation was wrong. "It's utsukuSHII, isn't it? Right?"だと思います。ここから、緊張した宮崎と生徒達の関係が急激に、become freindに変わるわけですから。>

クライマックスは「山場の部」にあるはずですが、寺田さんの読みによれば、「山場の部」がセクション3とセクション4に分裂しているわけですか。だとすれば、三友社出版教科書の編集者が『トットちゃん』の「構造読み」を誤ったということですね。

もしそれが事実だとすれば、非常に面白い問題が出てきます。というのは、この教科書編集には有能な高校教師だけでなく、優れた大学教師も加わっているはずだからです。逆に言えば、「構造読み」は、このような問題を浮き彫りにするわけで、だからこそ、単なる「形象読み」「主題読み」の準備作業として位置づけるのではなく、それだけを単独に追求する意味があるのです。

しかし、この物語の「構造読み」については、戸梶邦子先生にも読みの訓練を兼ねて、分析に参加していただくようお願いしてありますので、戸梶案が出てから私の意見を述べることにします。

<主題読みは、山場と終結部の形象読みの延長と題名読みで行い、クライマックスから「相互理解」の大切さ、最後の「文体が成立している」And the breezes across Tomoe were soft and warm, and the children themselves were beautiful. の文から、「米国と日本は外見・形は異なるが、そんなことを気にしない子ども達の姿は、美しい」「トモエ学園の方針は美しい」などがあがれば良いのではないのでしょうか？>

「主題読みは、山場と終結部の形象読みの延長と題名読みで行い」と寺田さんは書いています。しかし、三友社出版の教科書では題名が、"UtsukuSHII is beautiful"となっていますが、英語原書では、"The English-speaking Child" となっています。とすると、"UtsukuSHII is beautiful"という題名から主題読みをすることそのものが、原作者・黒柳徹子さんの願い（主題）を読み誤っていることになりはしないでしょうか。

また、ついでに述べておくと、IH氏は「記号研掲示板からの学び」と題する氏のHP記事の中で、"The English-speaking Child" を「英語の子」と訳し次のように述べておられますが、「英語の子」と訳したのでは、"The English-speaking Child" の意味は伝わってこないのではないのでしょうか。

<IH氏からの引用：また、トットちゃんの原文はどうなっているのか、図書館からかりてきて、「Utsukushii Is Beautiful」の出典の「英語の子」の部分の文書を私は参考資料としてメーリングリストで紹介しました。>

これはIH氏が、"The English-speaking Child" の意味を分かっていてこのような訳をしたのか、それとも "The English-speaking Child" の意味が分からなかったのかこのような和訳が生まれたのか—このどちらなのか私には分かりません。しかし、いずれにしても、英語の読みには「線引き」以前に、このような問題が常につきまとうのです。

だからこそ、私は寺田さんに「英語授業には、『線引き』以前に、もっとなすべきことがあるはずでしょう」と忠告したつもりでした。そして記号研には追試すべき実践記録が多くあるはずだから、

そこから先ず学ぶべきだと繰り返し述べてきたつもりです。またIH氏も、これらの著書から国語教育のヒントをも得ることができるはずだと信じています。>>

8 教材としての英語版『窓ぎわのトットちゃん』

当時の私は非常に多忙で、大急ぎで以上のようなコメントを書き、東海地区私学高校教育研究集会の講師として高山に出かけたのだった。『窓ぎわのトットちゃん』(1984, 第66刷)を研究室に置き去りにしてあったので、自宅で掲示板に書き込んでいるとき、それを手元に持っていなかったのもミスだった。というのは上記の日本語版原書では、教材化された章の題名が「英語の子」だったことを失念していたからだ。

そこでIH氏が、「Utsukushii Is Beautiful」の出典の「英語の子」の部分の文書を私は参考資料としてメーリングリストで紹介しました>と氏のHPで書いているのを見て、英語版原書の"The English-speaking Child"を「英語の子」と訳したのは、<氏が、"The English-speaking Child"の意味を分かっているこのような訳をしたのか、それとも"The English-speaking Child"の意味が分からなかったのかこのような和訳が生まれたのか—このどちらなのか私には分かりません>と書いてしまったのだった。

また、このような誤解をした背景には、<A new student arrived at Tomoe Gakuen.. He was big and tall for a primary school boy. Totto-chan thought he looked more like a junior high school student.>という英文を、氏が以前に下記のように「形象読み」をしている事実があった。氏には失礼だが、このような易しい英文を下記のように読み間違えているのだから、氏がまた同ような読み間違いをしているのではないかと思ったのである。

<「A new student」が「Tomoe Gakuen」にやって来た。「Totto-chan」は、たぶん幼稚園生ではないかとおもうのだが、「student」(学生)が「Tomoe Gakuen」に入学してくるのだろうか。(「Tomoe Gakuen」は、どんな年齢層の子どもを受け入れる学校なのか)>

<He was big and tall for a primary school boy. こども上の疑問と関わって、「大きく背の高い彼は、「Totto-chan」と同年代なのか」それとも「アメリカからやって来た彼を、受け入れる学校は「Tomoe Gakuen」しかなかったのか、入園したのか」。「Tomoe Gakuen」とは、私立の幼稚園生から高校生くらいを一緒に受け入れている学校なのか。もし、彼が「Totto-chan」と同年代だとすると、栄養をたくさんとれるアメリカから来たので成長が進んだということなのか(Miyazakiという苗字からすると、日本人の血が流れていると思われるので、そんなに大きく成長するとは思えない)。「for a primary school boy」(小学生にしては)ということとは、「彼は小学生なのか」>

しかし、しかし今よく考えてみると、"The English-speaking Child"を「英語の子」と訳すには余程の詩的センスを必要とする。それほど日本語の「の」という助詞は多義の意味を有するから(たとえば「都市の崩壊」と「都市の破壊」では同じ「の」でも主格と対格の違いになるし、「私の本」では所有格の「の」になる)、凡人は"The English-speaking Child"を「英語の子」と訳すことはできない。純粹に日本語だけを見た場合、「英語の子」における「の」は何を表すのか意味不明だからである。

そこで私は、"The English-speaking Child"を「英語の子」と訳すのは余りにも不自然で、だから誤訳ではないかと思ったのだが、これは全くの逆の話だったのである。つまり、「英語の子」を"The Child of English"と、そのまま直訳したのでは、英語として意味不明になるので、英訳者 Dorothy Brittonが日本語の意味をくんで、"The English-speaking Child"と意識したのであった。これは手元に日本語原書があれば簡単に確認できたことであったが、同時に「英語の子」という日本語を「ふくらまして読む」、すなわち「形象読み」できなかった私の学力にも問題があった。

そこでIH氏から私は次のような反撃を受けることになった。氏の掲示板では私からの引用を四角で囲んであることになっているが、ここでは< >で囲んである。また私によるIH氏からの引用は[]とした。

私の掲示板への書き込み記録（3） 投稿者：IH 投稿日：10月10日(月)

私の掲示板への書き込み（2）に対して、寺島隆吉氏からコメントをいただきましたので、私の補足コメントを述べさせていただきます。掲示板での寺島隆吉氏の論文の引用を四角で囲んでその後私のコメントを書く形にします。

<また、ついでに述べておくと、IHさんは「記号研掲示板からの学び」と題する氏のHP記事の中で、” The English-speaking Child” を「英語の子」と訳し次のように述べておられますが、「英語の子」と訳したのでは、” The English-speaking Child” の意味は伝わってこないのではないのでしょうか。[また、トットちゃんの原文はどうなっているのか、図書館からかりてきて、「Utsukushii Is Beautiful」の出典の「英語の子」の部分の文書を、私は参考資料としてメーリングリストでご紹介しました。]

これは氏が、” The English-speaking Child” の意味を分かっている和訳を巧くできなかったのか、それとも ” The English-speaking Child” の意味が分からなかったのかこのような和訳が生まれたのか—このどちらなのか私には分かりません。しかし、いずれにしても、英語の読みには「線引き」以前に、このような問題が常につきまとうのです。>

私が「トットちゃん」の原文がどうなっているのか、図書館からかりてきたのは、黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』（講談社）の日本語の原文です。私は、／『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子 講談社）の日本語の原文／が、英語の教科書の原典だと考えたのです。寺島氏のおっしゃる “The English-speaking Child” という英語版の原書の英語のタイトルを「英語の子」と訳したわけではないのです。

さて、私の不勉強で申し訳ないのですが、日本語の『窓ぎわのトットちゃん』を、黒柳徹子氏が自ら英語版の本を書かれているのでしょうか。それとも、誰か翻訳家が、英語版を書かれているのでしょうか。わかるようでしたら教えてください。『窓ぎわのトットちゃん』の日本語原文は、次のようになっています。最初の部分だけ、引用します。

英語の子（黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社、P225・226）

今日は、新しい生徒がトモエに来た。小学校の生徒にしては、誰よりも背が高く、全体的にも凄く大きかった。小学生というよりは、「中学生のお兄さんみたいだ」と、トットちゃんは思った。着てるものも、みんなと違って、大人のひとつ、みたいだったし。

校長先生は、朝、校庭で、みんなに、この新しい生徒を、こう紹介した。「宮崎君だ。アメリカで生まれて、育ったから、日本語は、あまり上手じゃない。だから、ふつうの学校より、トモエのほうが、友達も、すぐ出来るだろうし、ゆっくり勉強できるんじゃないか、という事で、今日から、みんなと一緒にだよ。何年生がいいかなあ。どうだい、タアーちゃん達と一緒に、五年生じゃ」

絵の上手な、五年生のタアーちゃんは、いつものようにお兄さんらしく、いった。「いいよ」

校長先生は、にっこり笑うと、いった。「日本語は、うまくない、といったけど、英語は得意だからね、教えてもらおうといい。だけど、日本の生活に馴れていないから、いろいろ教えてあげてください。アメリカの生活の話も、聞いてごらん。面白いから。じゃ、いいね」

宮崎君は、自分より、ずーっと、小さい同級生に、おじぎをした。タアーちゃん達のクラスだけじゃなく、他の子ども、みんな、おじぎをしたり、手を振ったりした。

このIH氏の便りに対する私のコメントは次のようなものであった。<< >>で囲まれた部分がそのコメントである。それを以下に再録して、そのあとで私の補足説明を加えることにする。

くく明日からは東海地区私学高校教育研究集会講師として高山に出かけます。その準備もあり全く時間がないので簡単なコメントのみで失礼します。以下が貴氏からの引用です。

私が「トットちゃん」の原文がどうなっているのか、図書館からかりてきたのは、『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子 講談社）の日本語の原文です。私は、『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子 講談社）の日本語の原文が、英語の教科書の原典だと考えたのです。寺島氏のおっしゃる"The English-speaking Child"という英語版の原書の英語のタイトルを「英語の子」と訳したわけではないのです。

これは迂闊でした。黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』（講談社）を研究室に置いてきたまま筆をとったのが間違いのもとでした。ちなみに私が買った本は1984年7月16日（第66刷）となっています。20年以上も前の本です。初版は1981年3月5日となっています。しばらく手にしていませんでしたので、どんな題名が付けられていたのか記憶に残っていませんでした。

確かに上記の本では、該当の章名は「英語の子」となっていました。しかし日本語の助詞「の」を英語ではよく所有格 's または前置詞 of で表現しますから、これを使って英語に直訳すると、"The Child of English" となって意味をなしません。ですから英訳者は、英訳の読者が理解しやすいように、意識して"The English-speaking Child"としたのでしょう。

また日本語としても「英語の子」は、このままでは不自然です。たとえば「犬の子」「山本さんの子（ども）」は日本語としては自然ですが、「日本語の子」はそのまま読んだ場合、全く意味不明ではないでしょうか。それと同じように「英語の子」は、そのまま読んだ場合、全く意味不明です。ですから、この不自然さに先ず気づくべきではなかったかと思います。

（そのような読みの力が「形象読み」の基礎学力だと思うのです。というのは大西さんの「文体の成立」とは、たしか「通常ではない表現」を指していたと記憶しているからです。）

さて、私の不勉強で申し訳ないのですが、日本語の『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子、講談社）を、黒柳徹子氏が自ら英語版の本を書かれているのでしょうか。それとも、誰か翻訳家が、英語版を書かれているのでしょうか。わかるようでしたら教えてください。

英語版は講談社インターナショナルから出ています。私の手元にあるものは、1982年8月12日の第5刷のものです。ちなみに初版は1982年6月20日で、訳者は Dorothy Britton です。また、このテキストには別売で素晴らしい朗読テープが付いていて、一人の朗読者が登場人物の全てを七色の声で「表現よみ」していて、効果音の素晴らしさと相まって、聞くものをうっとりさせます。>>

上記で書き忘れたことがある。それは、ハードカバーで出された英訳書は、1984年に同じ講談社インターナショナルから文庫版としても出版されていることである。私の手元にあるのは、1986年3月5日の第7刷で、この文庫版には巻末ノートとして単語や語句の訳注が付けられている。朗読テープが付いたハードカバー本が売り出されたとき別冊付録になっていた注釈書が巻末に付録として付けられている。その意味では余り辞書をひかなくても済むので、英語を楽しみながら自学自習したいと思うひとにはうってつけの教材になるのではないかと思う。

それはともかく、以上で教材“Utsukushii Is Beautiful”を「構造読み」「形象読み」「主題読み」をする準備は整った。野澤裕子氏、戸梶邦子氏による「構造読み」の原案も記号研「掲示板」に掲載された。IH氏の「構造読み」原案も氏のHPで掲載されたようである。そこでは次号ではIH氏、寺田氏、野澤氏、戸梶氏の「構造読み」案を突き合わせながら、「英語にとって『読み』とは何か」の研究をもう少し深めたいと思う。

NOTES

- 1 大西忠治が提唱した「科学的『読み』の授業」については、大西・茗溪学園中高校国語科 (1987), 大西 (1990) が入門書として役立つであろう。もっと詳しく説明的文章や文学作品の読み方指導について知りたいのであれば、大西 (1981, 1988) が参考になる。
- 2 教材「UTUKUSI IS BEAUTIFUL」は黒柳 (1981) がベストセラーになったのを契機に英訳版黒柳 (1982) が出版され、それが教科書に取り入れられるようになったものである。なお教科書への教材化に当たって一部、改作 (改悪?) されている。
- 3 あとで確認してみた結果、大西忠治は1992年に他界している。他方、薄井道正『大西忠治ノート』は1991年に発刊されている。したがって私が大西の他界後に『大西忠治ノート』が発刊されたのではないかという推測は誤りだったが、大西が薄井『大西忠治ノート・年譜・索引』(大西忠治教育技術著作集, 別巻1) にきちんと眼を通したとは思えない。なぜなら苦しい闘病生活の中では、薄井氏が編集した『大西忠治教育技術著作集』の校正だけでも大変な労力を必要とするからである。
- 4 上記で<英文「トットちゃん」であろうが、原文「トットちゃん」であろうが、それを「記録文」とあるという指摘は全くの驚きです。恐らく大西さんがこれを聞いたら「読み研」の水準の余り低下に嘆き悲しむのではないでしょうかと書いたが、後述のように、あとで「読み研」の責任者から、寺田さんが意見交換している相手は「読み研」の公式意見を代表しているものではないし、その人物が経営しているHPも「読み研」の公式見解を表明するものではないとのメールが届いた。
- 5 ただし岩井志ず子『授業はトキメキ』でも記号の数を指示した上で生徒に記号づけプリントを作らせる実践が載っている。この夏の実践報告のあと、戸梶先生は自分の学校 (府立市岡高校) の公開授業で「構造読み」の実践を報告し、大阪市内の高校から多くの参観者が見学を訪れた。私も当日は招待を受け (講演だけでなく) 戸梶さんの授業に齊藤喜博のいわゆる「介入」授業を試みたりもした。この授業の様子は市岡高校HP[<http://www.osaka-c.ed.jp/ichioka/>]「校長便り」第4号に載せられているだけでなく、『教育タイムス』という新聞にも報道された (2006年1月27日号)。資料としてAPPENDIXに載せておいたので参照されたい。

REFERNCES

- 岩井志ず子 (2006) 『授業はトキメキ』 あすなろ社/三友社出版
- 薄井道正 (1991) 『大西忠治研究ノート・年譜・索引』(大西忠治教育技術著作集, 別巻1) 明治図書
- ウラジミール・プロップ (1983) 『魔法昔話の起源』せりか書房
- ウラジミール・プロップ (1987) 『話の形態学』書肆風の薔薇
- 大岡信 (編訳, 2000) 『フェアブルの昆虫記』(上, 下) 岩波文庫
- 大西忠治 (1981) 『説明的文章の読み方指導』明治図書
- 大西忠治 (1988) 『文学作品の読み方指導』明治図書
- 大西忠治 (1990) 『入門・科学的「読み」の授業』明治図書
- 大西忠治・茗溪学園中高校国語科 (1987) 『科学的な読み方指導の提唱』明治図書
- 黒柳徹子 (1981) 『窓ぎわのトットちゃん』講談社
- 黒柳徹子 (1982) 『Totto-chan: The little girl at the window』講談社
- 国弘正雄・千田潤一 (2000) 『CDブック 英会話・ぜったい・音読: 頭の中に英語回路を作る本』講談社インターナショナル
- ジャンニ・ロダーリ (1990) 『ファンタジーの文法—物語創作法入門』筑摩書房
- ジェラルド プリンズ (1996) 『物語論の位相—物語の形式と機能』松柏社
- ジェラルド・プリンズ (1996) 『物語論の位相: 物語の形式と機能』松柏社
- ジェラルド・プリンズ (1997) 『物語論辞典: 増補版』松柏社
- 寺島隆吉 (1991) 『記号づけ入門』(授業の工夫シリーズ第1巻) 三友社出版
- 寺島隆吉 (1991: 80-100) 「英語版『大きなかぶ』を読む: 記号づけ実践の新展開を求めて」
- 寺島美紀子 (1990) 『英語授業への挑戦』三友社出版

寺島美紀子 (1990 :80-106.) 「絵本CROW BOYを読む：英語にとって『読み』とは何か」

中野好夫 (翻訳, 1966) 『チャップリン自伝』新潮社

野澤裕子 (2002) 『授業はドラマだ』あすなろ社／三友社出版

山田昇司 (2005) 『授業は発見だ』あすなろ社／三友社出版

APPENDIX 1 加藤郁夫氏 (科学的「読み」の授業研究会・事務局次長) からの便り

寺島様

ネットを検索しておりましたら、寺島さんの文章に行き当たり、「読み研」という言葉に惹かれて拝見しました。このネット上の文章がどのような経緯を持つものかわかりませんが、いささか気になることがありましたのでメールをさせていただきました。申し遅れましたが、読み研の事務局次長をしております加藤郁夫と申します。気になりましたのは以下の文言です。

最後に「現在、国語科の「読み研」のメーリングリストに入れてもらい助言を頂いています。するとあの英文「トットちゃん」は「記録文」であるという指摘を受けました。」という点についてです。英文「トットちゃん」であろうが、原文「トットちゃん」であろうが、それを「記録文」であるという指摘は全くの驚きです。恐らく大西さんがこれを聞いたら「読み研」の水準の余り低下に嘆き悲しむのではないのでしょうか。また原作者の黒柳徹子さんも『トットちゃん』が「説明的文章」＝「記録文」だと国語教師が分類しているのを聞くと激怒するのではないのでしょうか。

「読み研」のメーリングリストというのがどのようなものかはわかりませんが、少なくとも私たちの会が正式に運営するものではありません。読み研以外の人間は読み研方式を論ずるなという気など毛頭ありませんが、少なくとも「読み研」の正式見解のような受け取られ方をするのは心外なので、一言メールさせていただきます。いきなりのメールで失礼があればお許し下さい。加藤郁夫 (科学的「読み」の授業研究会・事務局次長)

APPENDIX 2 『教育タイムス』(2006年1月27日号)

教育タイムス

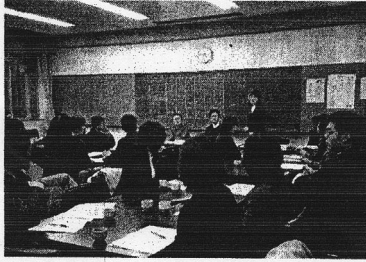
(第2588号) 2006年2月21日 (毎月1日、11日、21日発行)

記号研方式による英語授業を公開

市岡高校に各校から多数参加

三十三校から参加者集まる

高い英語能力がますます問われる時代。学方向上のための授業改善や工夫に心が集まっている。



向上フロンティアハイスクールに指定されている大阪府立市岡高等学校(大阪市港区市岡元町)・津野雅三校長)は一月二十七日に、「記号研方式による英語Iの指導」として、同校の英語科・戸梶邦子教諭による公開授業を開催。三十三校から参加者が集まった。

「限られた授業時間の中で量をこなす、それを生徒の頭の中に定着させる」ために取り入れたのが、以前から関心を寄せていた読みの方法(記号研方式)。

早大教育学部教授の寺島隆吉氏で、赴任していた北陸地方の高校で英語の学力を高める必要があったために編み出した方法である。

考案者の寺島教授がアドバイス

授業後の研究協議で寺島教授は、英文を読み取るために四段階あり、(1)文が読める。直訳直解ができる。(2)文章が読める。文と文のつながり、論理的関係がわかる。(3)段落が読める。文と文の「切れ」と「連続」がわかる。(4)全体が読める。全体の論旨・主題がわかる、という。記号研方式では、一文一文が読めるようになるだけではなく、英文を正確に読み取つていき、文構造をはっきりと理解した上で、さらに読みの力を高めるものであるという。

この日の研究協議の授業の有効性は明らかで、「文章の

全体的内容が把握しやすくなった」「文の構造が分かって英文が理解しやすくなった」など、昨年の結果では三年生の八割以上が英語理解に役立ったと回答しているという。

に焦点を当てた授業だったんでとらえた方がやりやすが、慣れないうちは一年生いだろう」と助言。また、から三年生まで大きなステップグループで議論をするので

はなく、個人同士で議論することを勧めた。それは議論するために何回も読むんだという。

「読み損なったときにテーマを得られないことがあがるが、議論が大事なものはそのことである。文章を読むときに大切なことは反復と対比に注目することです。そうするとまた違った主題が見えてくる。読んでいくうちに、編集されている教科書の疑問に気づき、原文を読みたいと思ったときに素晴らしいレベルに達している」と話。

幅広く質問や意見が出される

質疑応答に入ると、「リズム読み、あわせ読みの練習から発展していくのかイメーがつかめない」「音読練習は効果が出ないと言われているが…」と

声の訓練は、教科書よりもいろいろ文章を「クライマックス」の二ツノスは生徒によって違っているのか」など英語授業への幅広い質問が続いた。

寺島教授は、「物語の内容容について改めて問いかける」とも。読み返してもう一段深く読むなど、何層にも読んでいくことが重要となき、次々と出される疑問に具体的な解答やアドバイスをした。

大阪府教育委員振興室の西田恵二指導主事は「二年間の取り組みの成果と課題をこれからこの指導に生かしてほしい。卒業時の彼らの英語力が楽しみである」と市岡高校の取り組みを高く評価し、広く発信してほしいとの期待で締めくくられた。

